The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	東方学会平成25年度秋季学術大会シンポジウム「高大連携で取り組むアジア史教育の再建」レジュメ集
Author(s)	
Citation	大阪大学歴史教育研究会 成果報告書シリーズ. 2014, 10, p. 109-151
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/32766
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

東方学会平成 25 年度秋季学術大会シンポジウム

「高大連携で取り組むアジア史教育の再建」

レジュメ集

東方学会シンポ報告

2013年11月8日に開催された東方学会平成25年度秋季学術大会の「シンポジウムII　高大連携で取り組むアジア史教育の再建」で、大阪大学のわれわれの取り組みについて紹介・討論をおこなったので、以下に概要を紹介し、報告・コメント等のレジュメ（一部加筆・省略）を掲げる。

（桃木至朗）

シンポ概要

アジア諸地域に関する歴史研究のめざましい進展やアジア諸国との相互理解・交流の必要性の増大とは裏腹な、近年におけるアジア史教育の停滞状況（学生の無関心ないしアジア嫌い、関連専攻の志望者や授業の履修者の減少等々。また背景となる漢文の素養の解体状況）は、このまま座視すれば研究者養成の空洞化と学界の衰退につながるのではないかという危機感を背景に、故桜井由躬雄理事の提案に端を発する本シンポは実現した。企画の土台には、大阪大学で2003年以来展開してきた高大連携による、高校・大学から生涯教育まで含む、総合的な歴史教育刷新の取り組みがある（2005年に設立した「大阪大学歴史教育研究会」がその後の活動の中心になっている）。主な対象として今回は、日本に関係が深く巨大な研究蓄積がありながら、最近の教育の停滞や国際的対立の焦点にもなっている東アジア（漢文圏）の歴史を取り上げた。司会は、日本学術会議の高校歴史教育に関する検討、「日本史」の刷新と市民や世界に向けた発信などに奮闘してこられた三谷博氏にお願いした。プログラムは以下の通りである。

II．高大連携で取り組むアジア史教育の再建（801・802会議室）
（司会：東京大学大学院総合文化研究科教授　三谷博）
趣旨説明（大阪大学大学院文学研究科教授　桃木至朗）
アジア史を世界史でどう教えるか　石橋功（神奈川県立藤澤総合高校教諭）
大学教養教育・専門教育刷新の取り組み　向正樹（同志社大学准教授）
コメント
高校教育の現場から　大西信行（中央大学杉並高校教諭）
韓国の東アジア史教育の取り組みから　キム・ミンギュ（東北アジア歴史財団研究員）
西洋史における歴史教育の取り組みから　佐藤正幸（山梨大学名誉教授）
漢文の素養という角度から　合山林太郎（大阪大学専任講師）
総合討論

桃木による趣旨説明では、この問題が「高大連携」に関わる理由として、高校歴史教育がヨーロッパ中心史観を温存している（アジア史側もそれに代わる世界史像を提出しえていない）う

えに、1994年度から導入された「高校世界史必修」の仕組みが、センター入試で世界史を選択しない多数の高校生の世界史に関する知識・理解を、制度の狙いとは逆に大幅に後退させたこと、大学側が教養課程での対応をはじめとする組織的な教育再建の取り組みを怠ってきた点などを説明した。そのうえで、こうした状況に対応して適切な入試の出題や教科書の執筆、教養教育と教員養成教育などをおこなう能力をもった専門研究者＝大学教員を養成するために、専門教育を含めた革新が必要であるという、大学側の課題の大きさを強調した。

神奈川県立高の教員を長年勤められた石橋功氏の第一報告「アジア史をどう教えるか」は、アジア現代史を十分教えようとしない高校現場の状況と受験の悪影響、世界史と平行して教えられる日本史の内容面での古さ、世界商品を軸としてアジア史を中心に世界の一体化を取り上げる授業の試みなどを紹介したうえで、毎夏に高校・大学の教員が対等の立場で高校生向けの授業をおこない、教員の研究会を通じてその授業の共有化をはかる神奈川県教員団（高等学校教科研究会社会科部会歴史分科会）の実践や、地域・時代ごとに高校教員が分担して、スクラップすべき古い内容と教えるべき新しい内容を対比・説明した出版（『世界史をどう教えるか』山川出版社）など、これまでの目覚ましい高大連携活動の成果とその意義を論じた。

大阪大学の高大連携活動の事務局に、院生・ポスドクとして昨年度まで長期にわたって参画した向正樹氏の第二報告「大学教養教育・専門教育刷新の取り組み」は、氏が勤務先の「グローバル地域文化学部」（新設学部）で試みている「日本史を組み込んだ世界史を15回で教える授業」や、前年にコーディネートした高齢者大学校の通年世界史コースなどの例を引きながら、「研究者を目ざす院生が中心になって高大連携に活躍する」大阪大学史学系の新しい取り組みと、その先頭に立つ東洋史学専門分野の「合同演習」（博士後期課程院生による学部新入生への、東洋史学史などの「入門講義」などを含む）を軸とした積み上げ式のカリキュラム、それらが卒業・修了生の、研究者・中等教員や会社員など多彩な場での活躍の場を広げつつある状況などを紹介した。最後に氏は、各種の大学での歴史学・歴史教育について、将来のあり方などについて外部から一方的に決められてしまわぬよう、早急に共通認識を形成する必要があることを指摘して報告を結んだ。

高校・大学それぞれの先端的な取り組みを紹介した2本の報告に対し、日本史側から見た高校歴史教育、歴史の研究・教育の制度面と歴史の社会的・国家的意味づけ、東アジア史教育の背骨となる漢文教育、隣国の取り組みとして注目されている韓国の高校新科目「東アジア史」の趣旨と内容という、4つのテーマについてコメントがなされた。

大学付属校で主に日本史を教える大西信行氏は、選択授業に見るアジア史の不人気、多くの高校で必修科目とされている世界史Aにおいて学習指導要領により与えられた、中学校歴史で重点的に学んだ日本史とも結びつけながら世界史認識を広げる可能性が、ほとんど活かされていない現場の状況、生徒の漢字の素養の衰退の実例などについて紹介した。歴史認識や歴史教育の大家である佐藤正幸氏は、西洋諸国と違い歴史学部が存在しないために学問としての歴史の意味が教えられない日本の大学の弱点（高校と大学での歴史教育の不連続にもつながっている）、「国家が正史を編み歴史を管理する」東アジア流は、国家を超越した啓示宗教をもたな

いため歴史が無謬性の根拠となってきた東アジア文明のありかたを土台にしていることなど、氏の年来の主張をコンパクトに説明した。

次に日本文学・国語学専修で教える合山林太郎氏は、江戸時代には漢詩文・漢学に親しむ窓口がいろいろあったのが明治以降に狭まっていった過程（詩といえば漢詩だったのが「漢詩という特殊ジャンル」に転落したこと、自分で漢詩を作らず読むだけになったことなど）をトレースしたうえで、現在の教育現場における困難と、毎時間初見の漢詩を配り時間内に調べて読ませるなど漢詩・漢文にふれる機会を増やす授業法などを紹介した。都合で最後に回っていただいた、韓国で新科目「東アジア史」の設立に取り組んだ金旼奎（キム・ミンギュ）氏は、東北アジア歴史財団設立のきっかけとなったことで知られる歴史認識をめぐる日本・中国との対立のなかから、むしろ積極的な相互理解をつくりだす方向でこの高校新科目が構想されたこと、教科書執筆の留意点と困難さ、新旧教科書の単元の変化と今後の展望などを論じた。

最後の総合討論では、歴史の学習・教育一般の根拠や方法を問う質問のほか、大阪大学の歴史教育について、「最新の研究にもとづいてコンパクトに説明する」方法が新しい正史（権威）を生むのではないか、研究者養成と歴史教育の関係はどう考えられているか、取り組みを通じてどこに焦点を当てたどんな「型」の研究者を作りだそうとしているのかなど、重要な問いかけがつぎつぎ出された。時間の都合で、大阪大学や協力関係にある学会、高校教員の研究会などでこれまで議論して来た枠を超える、新しい議論が十分に行われるところまでは行かなかった。しかし、純アカデミズムの色彩の強い本会で、教科書編集者や高校教員を含む 40 人あまりが参加して、専門研究者とともにこの問題を討議できたのは、問題提起の意味では成功だったと考える。これをきっかけに「専門研究者には無縁の教育の話」という単純な二分法を打破して、東方学やアジア史の分野でも西洋史や日本史に劣らず組織的かつ系統的な取り組みを可能にすべく、継続的に議論や改革を進めることが、次なる課題であろう。

（『東方学会報』No.105〈2013 年 12 月 25 日発行〉掲載の桃木による概要報告に一部加筆）

「高大連携で取り組むアジア史教育の再建」趣旨説明

桃木　至朗
大阪大学歴史教育研究会代表
http://www.geocities.jp/rekikyo/

1．アジア史研究の進展やアジアとの相互理解・交流の必要性の増大と裏腹な、アジア史教育の停滞・危機

・人文系学部の東洋史（アジア史）専攻への進学者、教養課程でその種の科目を選択する学生のいずれもが顕著な減少・・・国際系・外語系学部の中国（語）専攻などの受験生／進学者数も同傾向

➡ やがて研究者養成も空洞化？

＊イスラーム諸国の歴史研究（ただし西アジアに偏る）はむしろ学生が増加？

－「日本にしか関心のない若者」の増大とアジア嫌い（欧米に対しても無関心だが）プラス明治以来衰え続けた漢文的・儒教的素養の最終的解体？

－高校教育や大学入試における、ヨーロッパ中心史観と日本一国史観（東洋史内部では古い中国中心史観も）にもとづく枠組みの維持・再生産←断片的に新しい視野を導入するが、全体像が示されないのでかえって混乱

> **「高校世界史必修」の失敗**→このまま日本学術会議史学委員会の2011年提言に従い、世界史にかわって「歴史基礎」が必修になれば、高校での世界史履修者そのものが激減するシナリオすら考えられる（→２ページの資料参照）

－西洋史（例：日本西洋史学会第60回大会シンポ「世界史教育の現状と課題」2010年）などとくらべ、対策は個別的にしかおこなわれていないし、アジア史教育の社会的有用性を説得的に示す方向にはあまり向かっていない。

2．大学と研究者の革新の必要性

・以上を前提とした教養教育、教員養成教育をしなければならないことはもちろん、適切な入試の出題や教科書の執筆、魅力的な教養教育や教員養成教育ができるような専門家養成のためには、狭義の専門教育も（高大連携のもとで）変えねばならない←高校への働きかけを中心とする普通の高大連携から始まった阪大の歴史教育研究会（2005～）が、2010年代に入って大学教育に軸足を移してきた理由・・・研究者養成においても、外国史研究に必要な研究能力や語学力・現地体験の訓練と並行して、(1)自分の研究を世界史の中に位置づけられる、(2)通史や学史が語れる（教えられる）訓練で成果をあげる。

・そういうなかで、「アジアを正当に位置づけ日本を完全に組み込んだ世界史」をどう構築し教えるかが問われている（「歴史基礎」もそういうものにできなかったら大変）→教養課程用世界史教科書『市民のための世界史』を2014年３月末に刊行予定。

・本シンポも、この問題を多面的・国際的に考える機会にしたい→代表的な提携相手である神奈川教員団（高校教科研究会歴史分科会）と、阪大自身の取り組みを土台として。

３．参考文献

桃木至朗 2009a.「コラム歴史の風　逆風のなかの東洋史学」『史学雑誌』118(1)、pp.34-36.
桃木至朗 2009b.『わかる歴史・面白い歴史・役に立つ歴史――歴史学と歴史教育の再生をめざして』大阪大学出版会.
桃木至朗 2009c.「現代日本における歴史学の危機と新しい挑戦」大阪歴史科学協議会『歴史科学』197、pp.1-12.
桃木至朗 2013.「日本のある大学における「東洋史」専門教育の再建～「阪大史学の挑戦」を牽引する東洋史学専門分野～」(名古屋大大学院文学研究科附属日本近現代文化研究センター国際シンポジウム「東アジア関係学の構想」2013 年２月 23・24 日、於名古屋大学)

資料：高校「世界史必修」の実際

・中学校社会科歴史がほぼ日本史のみ（外国史は日本史に関係のあるところだけ教える）であることを前提とした、現行（1994 年度から施行）の高校世界史必修のしくみ→世界史 A（２単位、近現代中心）または世界史 B（４単位、伝統的な通史）と、日本史（A または B)・地理（A または B）のうちの１科目必修・・・普通科高校の生徒は地理・日本史・世界史をすべて履修するというかつての仕組みはとっくに消失しているが、地歴科教員は若手も含め、自分の専門科目については B の履修者ばかりだし、大学入試で要求されるのはほとんど B なので、「B が本業、A は片手間」という発想を変えない。

・全体的な授業時数不足の中で、全校必修の世界史として B を開講できる学校は少なく、多くの高校では、(本当の不開講＝履修漏れはごく少数として) 必修で世界史 A を開講、そのあと生徒はコースや入試科目に合わせて世界史・日本史・地理のどれかの B を学ぶことになる。ところが世界史は日本史・地理に比べ暗記事項が圧倒的に多いので時間が足りず、多くの高校が必修の世界史 A において「世界史 B の前半もしくが後半」を教え、残った部分は入試で世界史 B を受験する生徒のみに教える→入試で世界史を受験する生徒（センター入試の世界史受験者はコンスタントに減少して、40 万人近い地歴受験者のうち現在は９万人程度）以外は、「世界史 B の半分だけ教えられてなんだかわからずに終わったし、入試で選択しないからそれをわかるように努力する必要も感じない」状況で卒業する。つまり少数のセンター入試世界史受験者以外の世界史の知識・理解は昔よりずっと後退している→ところが大学教養課程でそれを補う体系的な世界史像やアジア史像の教育はほとんどおこなわれず、高校での世界史 B の暗記を全体とした「○○史の諸問題」式の教養科目が今でも多い。

・**日本学術会議の提言**「新しい高校地理・歴史教育の創造－グローバル化に対応した時空間認識の育成」（2011 年８月３日　http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/division-15.html）が、各分野ごとの学会による高校で教えるべき内容の精選、世界史必修にかわる必修科目**「地理基礎」「歴史基礎」**の開設などを提案。「歴史基礎」の内容の検討は、学術会議だけでなく文科省から委嘱された実験校などで進められており（地理とも統合した「地歴基礎」案もある）、高校学習指導要領の改定時期から考えると、早ければ 2023 年度から実施される可能性がある。「世界史と日本史の統合」「アジア重視」「講義－暗記だけでなく調べる、発表する、討論するなどの内容を大幅に増やす」などの大枠は一致しているが、センター入試への位置づけ、世界史と日本史の割合や通史型か近現代史中心型かなどの点は未定。

＊教育再生会議の大学入試改革案との関係はまだ議論されていない。

アジア史をどう教えるか

石橋功

Ⅰ　歴史教師の反省

①「誰も戦争を教えてくれなかった」から

第二次世界大戦までいかない　いったとしても駆け足で終わる

高校生からの指摘　　十数年前までの自分

理由　a 準備不足　年間計画が不十分　b 最後までいく意味がわかっていない

c 最後までの教材・指導案が用意されていない。

②受験の世界史からぬけられなかった

受験校の薄めた授業を受験校でない高校でおこなってきた

事件史中心の暗記必要な授業

国民の常識としての歴史とは何かの追求が足りなかった

Ⅱ　日本史の実践

① 驚き　細かい（小学校、中学校で既習ずみの結果か？）

② 大昔から日本が存在

③ 色濃く残る皇国史観　天皇中心の古代史　征夷大将軍に意味を置く時代区分

④ アジア史的視点が少なくヨーロッパ中心史観が世界史以上に強い

⑤ ナショナルヒストリー中心でグローバルな視点が欠如　松方デフレなど

⑥ 日本史必修化の動きの問題

Ⅲ　アジア史を中心に世界の一体化を取り上げる授業の構築

① 日本近世史プリント１　参照

世界史のプリントにも活用

② アジアを中心とした世界商品の授業　世界史プリント参照

③ 19 世紀後半に逆転していくアジアと西欧を植民地化でとらえる

④ 日本とアジア　とりわけ韓国・朝鮮との近代史　日中近代史をきちんと教える意味

多くの東南アジア諸国との関連を教える意味

Ⅳ教材作りの共有化

① 神奈川県高等学校社会科部会歴史分科会の実践

世界史の高大連携（大阪大学、東京大学との提携）　高校、大学の教員が対等な関係で高校生に授業を行い、その授業の共有化をはかる

「18 世紀アジアをどう教えるか」「19 世紀アジアをどう教えるか」等がテーマ

② 2013 年度全国歴史研究会神奈川大会の実践

近代世界システム論をどう教えるか　遊牧民をどう教えるか

③ 大阪大学の研究会への集団参加

④ ＡＡＷＨの集団参加

アジア史をどう教えるか発言要旨

藤沢総合高校　石橋　功

こういった場所で何を発表していいのかわからないが、日常の自分の授業を中心に報告したい。私は高校教員生活37年、来年で退職だが、「誰も戦争を教えてくれなかった」（古市憲寿著）を数年前に読み、今、非常に反省している。そこでは著者が、桃色クローバーゼットという人気グループと対談していてそのグループの子たちが、第二次世界大戦のことをほとんど知らないでいるということ、また学校でも習ってきていないという事実が述べられていた。本校の生徒にも確認したところ似たようなものであった。私自身、世界史B（週４時間）とそれに続く世界史研究（週２時間）の授業で教科書を１冊取り組むことで、第二次世界大戦までの学習展開をしてきたため、世界史研究を取らない世界史B選択者の四分の三の生徒は第二次世界大戦を学ばないという結果となっていた。このことに気づき、第二次世界大戦までは必ず世界史Bで進むことにしたのはこの数年である。こういったケースは私だけでなく神奈川の高校での平均的日常である。なぜ第二次世界大戦までいかないかというと、現代まで学ばせる意義をそれほど重視していない、また最初から最後までの指導案が用意されていないというところに原因があるようだ。日常的なところでグローバル化が進み、中国、韓国、アメリカ、フィリピン籍の子どもがいつも在籍する高校でこうした現代までの授業をする意味は、最低限、面白がってヘイトスピーチデモに参加する高校生はなくせるということである。関妃の話しで韓国での対日感情の悪さを説明し、南京虐殺で中国での対日感情の悪さを説明するということは絶対に必要なことと考えている。

今年、十年ぶりに日本史Bを担当して、高校日本史のむずかしさにぶつかった。まず細かい。これは小学校、中学校で日本史を学んでいるのだから詳しくなるのは当然である。神奈川では今年から日本史が必修になっており、すべての生徒が日本史を学ぶこととなった。その説明として、外国の歴史を学ぶ世界史が必修で日本のことを学ぶ日本史が必修でないというのはおかしい。という論拠であった。しかし、これは世界史の内容をわかっていない発言である。日本の世界史はあくまでも日本中心の世界史であり、世界中の歴史を均等に学ぶのでないということ、政治家たちが学ばせたがっている「日本史」は中学校で学ぶ日本史であり、必修世界史はこうした日本社会に影響を与えた世界の歴史、形を変えた「日本史」なのである。

次に驚いたのは日本史では、日本という国が大昔から存在するということである。縄文時代の日本、弥生時代の日本というように。今のような均質な日本の成立はどう考えても明治以降であり、日本の伝統は江戸時代くらいからである。そして、古代から日本があるというのは古事記・日本書紀を信じなくてはならないということになる。

もう一つの驚きは皇国史観が色濃く残っているということである。1192 年源頼朝が征夷大将軍になることで鎌倉幕府成立、1338 年足利尊氏が征夷大将軍になることで室町幕府成立、1603 年徳川家康が征夷大将軍になることで江戸幕府成立ということは、征夷大将軍に任命する天皇の存在を浮かび上がらせることを強調する内容である。実際は、源頼朝も徳川家康もすぐに将軍をやめている。将軍ということで政治を行った部分は少ないということが歴史的事実である。

最後に、日本史はナショナルヒストリー中心でアジア史的視点が少なく、グローバルな

視点が少ないということである。一番それがでて事実と乖離しているのが、大交易時代の扱いと鎖国である。15 世紀モンゴル帝国のユーラシア大陸の統一と鄭和の航海がきっかけとなりアジアは大交易時代に突入する。それとともに東シナ海には私貿易を行い、場合によっては海賊となる海の民倭寇が活躍しはじめる。倭寇は明確な国境がなく国民意識も共通の言語を持たない時代、日本人とか朝鮮人とか中国人とか決められない。倭寇の中にはポルトガル人もはいっていたことは、鉄砲伝来の記録からももわかる。そうした大交易時代に、ヨーロッパが中南米の銀をもってアジア市場にはいってきたのが大航海時代である。ヴァスコ＝ダ＝ガマが、インド航路を発見するまでヨーロッパ人が行ったことがない錯覚にとらわれるが、ギリシア商人が中国・インドに行っていたことは歴史的事実であり、インド、東南アジアではローマ金貨が多く発見されていることはこれを裏付けられている。ヨーロッパ人がなぜアジアに行かなくなったかというと、ヨーロッパで金が取れなくなりアジア市場に来れなくなったからである。コロンブスのアメリカ到達以降、中南米の銀を手に入れたヨーロッパ人がそれを持ってアジア市場にやってきたのだ。

ポルトガル人との貿易を日本では南蛮貿易というと、生徒はポルトガルと日本の交易と勘違いする。後のオランダとの貿易も同じであるが、ヨーロッパ人は基本的にアジア物品の中継貿易で巨利を得た。特に、中国の絹、陶磁器を日本に運び、日本から銀を中国に運ぶ貿易は特にもうけが大きかった。南蛮貿易も形を変えた倭寇の貿易につながるものであった。旧来、倭寇は豊臣秀吉の海賊取り締まり令でいなくなったとされてきた。しかし、倭寇は長崎に来る中国船という形で残った。唐船と呼ばれた船は、従来、中国船としてきたがシャム船もあれば安南船もある。つまり長崎での唐船は倭寇の形を変えたものであった。そうすると鎖国というものもかなり概念を変える必要があろう。

以上のような流れが、現在の日本史ではどう取り扱われるかというと近世のはじまりは、ポルトガル人の来航、鉄砲伝来であり、大交易時代などの言葉は一切出てこない。あいも変わらないヨーロッパ中心史観であり、倭寇は、前期倭寇は日本人、後期倭寇は中国人中心と記述されている。また、鎖国はさすがに四つの窓と記述され、長崎と並んで、対馬、琉球、松前が紹介される。江戸時代が、鎖国していて世界に取り残されたとされる旧来の歴史は、軍事面の遅れに焦点を合わせすぎているし、産業革命後のヨーロッパの経済成長を大きく見過ぎてきたとに基づく。江戸時代の絹と木綿の国産化の成功、国民国家形成の歴史をつくる国学の発達、資本主義の精神となる通常道徳の発達、すすんだヨーロッパの学問を吸収する蘭学の発達等々、江戸時代が鎖国で遅れた時代とした明治時代につくられた歴史からの脱却の必要がある。

こうした新しい歴史学の展開を、私たち高校教員に提供したのは大阪大学の実践である。大阪大学の桃木教授、秋田教授といったかたがたが夏休み、神奈川の高校の世界史教員とともに同テーマで一緒に授業を行い、最新の歴史研究を高校の教材化にしてきた。近年のテーマでいうと「19 世紀アジアをどう教えるか」「18 世紀をどう教えるか」などである。こうした高大連携がなければ旧来の歴史教育を刷新することはできなかった。大学側の研究が教科書になるだけでは高校にはおりてこない。その研究がどう授業に組み込むかが必要なのである。

こうした東方学会に高校教員が発表させてくださることには感謝しているし、高校と大学の連携が今後も進むことを期待する次第である。

日本史近世史プリント１

ｸﾗｽ（　　）氏名（　　）

１，15 世紀にはいるとアジアは「大交易時代」に突入していく、このきっかけとなったのは何か記せ。

２、「大交易時代」になってから東アジアはどういった状況になったか記せ。

３，倭寇とはどういった存在であったか記せ。

４，日明貿易の主な輸入品と輸出品を記せ。

５，「大交易時代」にヨーロッパ勢力がアジアに入ってきた時代を何と呼ぶか記せ。

６，16 世紀アジアの「大交易時代」にヨーロッパが参入できた理由を記せ。

７，1543 年どういった形で鉄砲が伝わったか記せ。

８，南蛮貿易はどういったものであったか記せ。

９，倭寇はどういう形でいなくなっていくか記せ。

10、「大交易時代」が終わっていく経過を記せ。

東南アジアプリント１

ｸﾗｽ（　）氏名（　　）

○仏教の国々

①大乗仏教の国々

ａ（　　）首都（　　）　中国文化の影響を受けた

第二次大戦後フランスから独立　その後介入した（　　）と十年以上戦う
これがベトナム戦争　その後共通の敵（　　）が登場したので日本とも仲良くなる　現在　（　　）の一つとして発展中

ｂ（　　）中国人の東南アジアに来た（　　）が造った国
東南アジアで最初から近代化した国　イギリスから独立
海の道の玄関として繁栄
インド洋と太平洋を結ぶ（　　）海峡の寄港地

大乗仏教とはどういった宗教ですか？

②上座部仏教の国々

ａタイ　首都（　　）　東南アジアで唯一植民地にならない
東南アジアの玄関で日本企業の進出拠点

ｂミャンマー　首都（　　）東南アジアでもっとも貧しい国
軍事独裁政権　抵抗する（　　）

ｃ（　　）首都ビエンチャン

ｄカンボジア　首都（　　）世界遺産（　　）が存在

○イスラムの国々

ａ（　　）首都（　　）電化製品の輸出が輸出の大半を占める
（　　）に学ぶルックイースト運動を展開マハティール首相

ｂ（　　）首都（　　）　17 世紀から日本と交易
（　　）の植民地　第二次世界大戦後日本の協力で独立
現在　経済発展中

ｃ（　　）東南アジアでもっとも豊かな国
（　　）を産出

○キリスト教の国々

ａフィリピン　首都（　　）　16 世紀から（　　）の植民地
その結果宗教は（　　）
人材派遣で繁栄

日本とどういった問題が生じていますか？

ｂ（　　）最後の国際連合加盟国
（　　）から宗教対立で独立

日本の自衛隊が（　　）を行った

東南アジア史プリント

ｸﾗｽ（　　）氏名（　　）

○東南アジアの基層文化の形成　　インド、中国の影響

例えばベトナムの（　　）文化など

○４～５世紀　インド文明が東南アジア全域に入ってくる　　例外　北ベトナム

具体的には？　①（　　）教　現在はインドネシアの（　　）島のみ残る

カンボジアの（　　）遺跡は（　　）教寺院

② 大乗仏教ーーーー現在は東南アジアから姿を消す

ジャワ島の（　　）遺跡は大乗仏教遺跡

③（　　）語　　この言葉のつづり方文字が現在の東南アジアの文字の源

○１１世紀～１６世紀　上座部仏教、イスラム教、キリスト教の拡大

①上座部仏教が（　　）から現在のビルマに入り東南アジア大陸部に伝わる

②イスラム教が１４世紀頃から東南アジア島嶼部で広がる

③スペイン人の支配で（　　）がキリスト教化していく

○ヨーロッパの大航海時代の目的地としての東南アジア　香辛料と香木

①（　　）ーーーージャワ島

②クローブと（　　）ーーーーー（　　）諸島

上記の香辛料貿易を独占し、１６４１年「海の道」のポイントであるインド洋と太平洋を結ぶ海峡の都市（　　）を支配し、日本貿易を独占した（　　）が世界史最初の覇権国家となる。

③（　　）ーーーーベトナム中部

④白檀ーーーーーーーこれをめぐる争いからチモール島の支配をオランダとポルトガルが分割支配　この結果オランダ支配のイスラム教中心の西チモールとポルトガル支配のキリスト教徒中心の（　　）に分裂

２１世紀インドネシアから独立　日本の自衛隊が平和維持活動を行う

○東南アジアの植民地化　　植民地化して（　　）などの商品作物を現地でつくらせ富を得る

現在のミャンマー、マレーシア、シンガポールを植民地化した（　　）

現在のベトナム、ラオス、カンボジアを植民地化した（　　）

現在のインドネシアを植民地化した（　　）

スペインから１８９８年フィリピンを奪い植民地化した（　　）

植民地に唯一ならなかった（　　）

○東南アジア独立のきっかけとなった第二次世界大戦の日本支配

現在も残る日本語（　　）から日本支配の現地の反発がわかる

○１９８０年代以降東南アジアは経済的統合をすすめる（　　）のもと急激な経済成長を現在もおこなっており、日本との経済的結びつきは非常に深くなっている

ヨーロッパプリント３

ｸﾗｽ（　　）氏名（　　）

１、アジアの大交易時代に栄えていた場所を２カ所記せ。

１、アジアの大交易時代のきっかけはなにか記せ。

２，大航海時代という１５世紀末からのヨーロッパの海外進出の目的地と求めた商品を書きなさい。

①インドーーー（　　）（　　）　　②日本ーーー（　　）

③モルッカ諸島（　　）（　　）

３，大航海時代のさきがけとなった事件を年代順に書きなさい。

①１４９２年

②１４９８年

③１５１９～１５２２年

④１５４３年

４，大航海時代の結果を２つ記せ。

①

②

５，主権国家とはどういう国家ですか？

６、主権国家の最初の絶対王政の特色をあげなさい。

７，絶対主義の典型である王と国名を記せ。

ヨーロッパプリント４

ｸﾗｽ（　　）氏名（　　）

１，１７世紀の世界商品とその産地をあげよ。

２，１７世紀の世界商品をおさえた国、覇権国家オランダの繁栄の理由を３つ記せ。

①

②

③

３，オランダの衰退の原因を２つ記せ。

①

②

４，１８世紀の世界商品を４つと主な産地を記せ。

５、１８世紀の世界商品とその産地を記せ。

６、１８世紀の世界商品をつなぐ大西洋三角貿易を図式化しなさい。

７、上記の三角貿易の最後の勝利者はフランスでなくイギリスであった理由を説明せよ。

８、イギリスは三角貿易の富を用いて何をしましたか？

９、イギリスの産業革命は何を最初につくったか？またフランスと日本は何か記せ。

10、産業革命とは何が変化したことか説明せよ。

大学教養教育・専門教育刷新の取り組み

同志社大学グローバル地域文化学部・准教授　向正樹

1. ベールを脱ぐ「国際主義」の切り札，同志社大学グローバル地域文化(GR)学部

2013年4月開設．高度な言語運用能力（英語+α），海外研修を通じた実地経験，地域の文化・歴史・社会に関する学際的な知識を基礎に，グローバルな観点から現代世界が抱える諸問題を研究．報告者は「中国語入門」「中国語インテンシヴ」「導入セミナー」「アジア・太平洋地域文化の形成I」＜資料A＞「アジア太平洋の課題（アジアにおける地域紛争と平和構築）」担当．→言語と専門に精通した教員，今日的問題の解決，「古典講読？何それ」

2. 「阪大史学」，挑戦の嚆矢は東洋史学から

「阪大史学」と銘打ち大阪大学歴史系分野がすすめる各種の挑戦は，歴史学界や教育界の有識者の間でも知られるところとなりつつある．とりわけ近年，桃木至朗らを中心に進められている歴史教育刷新の活動は，高校教員や一般市民のリカレント教育と，そこでの経験を通じた専門研究者を含む幅広い人材育成を目指す，画期的な試みとして新聞などでも取り上げられた．＜資料B＞→理論と実践のバランス，西洋史学・日本史学との連携

3. 歴史教育刷新活動における東洋史学徒たち

具体的には2003年度より21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」の一環として実施された計四回の全国高等学校歴史教育研究会（全国の高等学校教員らを招き近年の歴史学の成果を解説）を端緒とし，月例会形式での継続的なリカレント教育と教材開発のため，2005年10月に発足した大阪大学歴史教育研究会である．そこには，博士前・後期課程の院生も履修生として参加，各専門分野の院生およびポスドクが運営事務にあたる．→研究者を目指す院生が中心になって高大連携の活動に活躍

4. THIS IS SPARTA !?

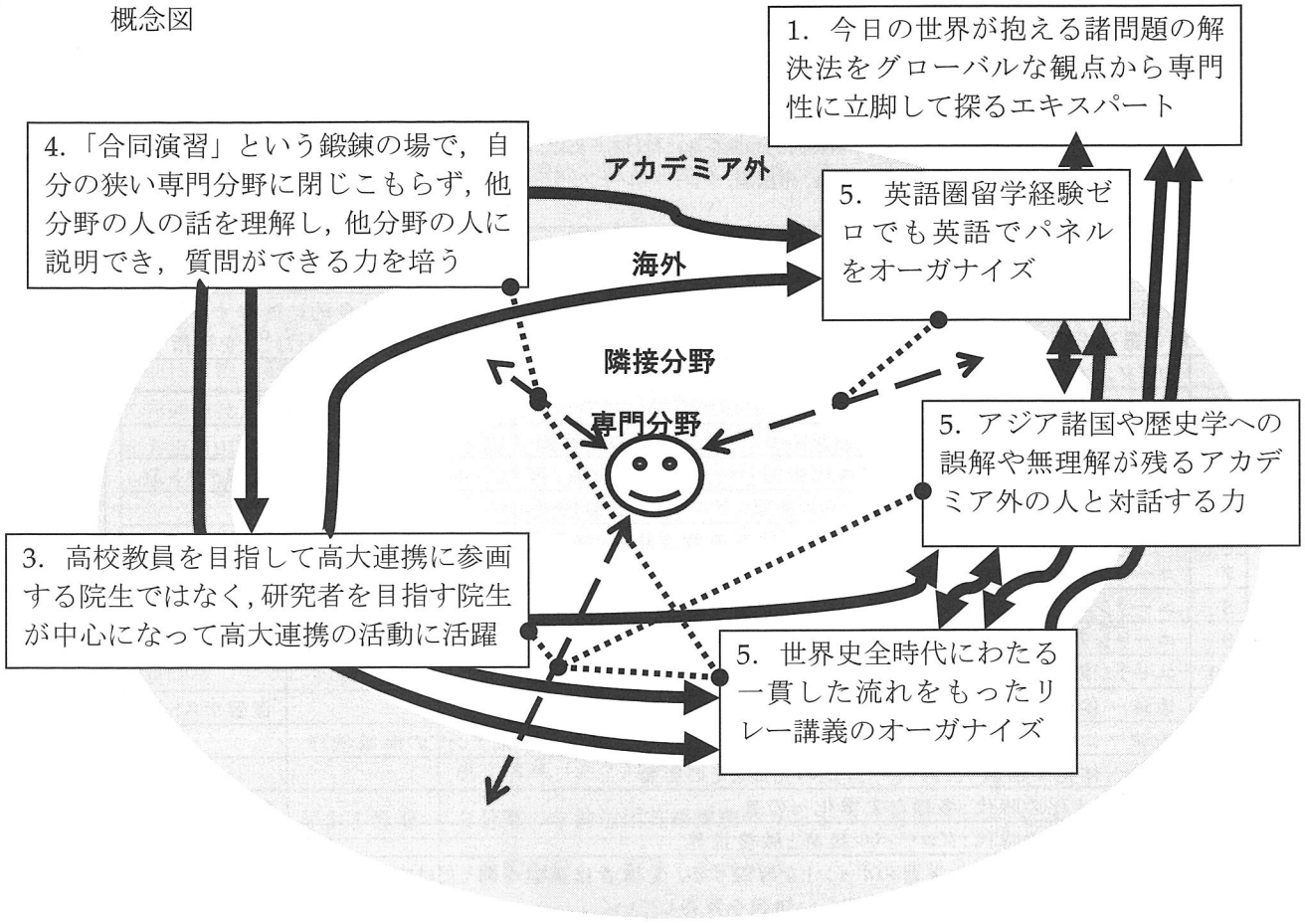
こうした活動を可能にする前提として，阪大東洋史の合同演習はじめ集団的なカリキュラムや指導体制，歴史系三分野の多彩な共通必修科目や史学系共通必修科目があり，専門分野に閉じこもらず問題意識を他分野の仲間と共有する契機をもたらしている．また，他大学から来た院生に共通教育から受けさせる，ドクター院生に入門講義をさせる，といった方式で全体的ボトムアップもはかっている．＜資料C＞→他分野の人の話を理解し，他分野の人に説明でき，質問ができる力を培う

5. 継承される挑戦

こうした専門に閉じこもらない活動と企画運営やアカデミア外への発信の実績を積んだ人材が，WHA（2011年北京・首都師範大学），AAWH（2009年大阪，2012年ソウル）といった世界史・グローバルヒストリーの学会で分野横断的なパネルの主催，報告など目ざましい研究実績を挙げるほか，高校教員，会社員，マスコミ関係者となり，市民講座・社会人向けスクールでの世界史講座のコーディネーター（他の院生・若手が順次講義する）となるなど活躍の場が広がりつつある（次頁「概念図」参照）．＜資料D＞

東方学会シンポ「高大連携で取り組むアジア史教育の再建」
11月8日（金）　日本教育会館（神田神保町）
配布資料（向正樹）

概念図



課題　　"The academy is a big ship and it takes a long time to turn it."

・今日の問題の背景を深く知るために「消費」される高度の専門性
　　⟶「再生産」なき「消費」はエキスパートの枯渇をもたらす
　　⟶メジャーでない言語のエキスパートである専門研究者の落ち着き先は？
・アジア諸言語の原典研究の拠点はどこにどれだけ必要？（潰すのは簡単，再建は困難）
　　⟶設備面で有利な旧帝・国公立に私立の「老舗」を合わせるとかなりの数
　　⟶今後，基礎・応用といった棲み分けで研究拠点の画一性は打破されるか
・無為無策のまま各拠点の衰退が続けば，基礎研究自体が弱体化
　　⟶基礎訓練崩壊（←当分各種原典講読会の地域・テーマ毎の組織化で対処）
　　⟶日本の基礎研究蓄積に拠って立つ日本独自のアジア論の衰退

※早急に対応策についての共通認識を形成しなければ，アカデミア外の識者の判断や他分野出身のトップの一存で一方的に決められる危険
※舵を取るのは誰？

＜資料A＞　同志社GR学部シラバス——日本史を組み込んだ世界史を15回で

2013年度

○アジア・太平洋地域文化の形成1(アジア地域文化の形成) 2単位 春学期 今出川 講義形式
Historical Formation of the Asia-Pacific Regions and Cultures 1 -The Formation of Asian Regional Cultures-

＜概要＞ アジア・太平洋地域の文化に関する導入的知識を身に付けるために，その形成及び展開に関わる歴史過程について学習・考察することを目的とする．世界システム論，帝国論，グローバル・ヒストリーの動向をふまえ，古代から現代までのユーラシア世界の歴史を段階的・総合的に概観する．

＜到達目標＞ われわれをとりまくグローバルな政治・経済・文化状況を長い歴史の中で総合的に理解する目を養う．事象の羅列を頭に詰め込むのではなく，古代から現代までの世界史の長期的な流れをつかむことを目指す．

＜授業計画＞ われわれをとりまくグローバルな政治・経済・文化状況を長い歴史の中で総合的に理解する目を養う．事象の羅列を頭に詰め込むのではなく，古代から現代までの世界史の長期的な流れをつかむことを目指す．

1	ガイダンス(授業の進め方，世界史，グローバル・ヒストリーの潮流)	
2	導入：地球環境と歴史の構造	
3	古典文化の形成期：概観説明，インド=ヨーロッパ語族の大移動	
4	古典文化の形成期：ユーラシア古代帝国(ローマ，マウリヤ朝，漢)とシルクロード	復習テスト①
5	ユーラシア世界の形成：遊牧圏からの衝撃(ゲルマン，五胡)とその後	
6	ユーラシア世界の形成：「古典文化」と「牧畜遊牧文化」の融合	
7	ユーラシア世界の発展：世界帝国(アッバース，唐)の出現，シルクロード交易と日本	
8	ユーラシア世界の発展：中央ユーラシア二重統治国家の時代	復習テスト②
9	ユーラシア世界の発展：海をとりまく交流圏，アラビア海～東南アジアの大海域世界	
10	ユーラシア世界の発展：モンゴル帝国とユーラシア交流圏の繁栄	
11	地球一体化の進展：14世紀の危機～ポスト=モンゴルの時代	復習テスト③
12	地球一体化の進展：ヨーロッパ世界システムとアジアの近世帝国，東アジアの海域秩序	
13	地球一体化の進展：世界の一体化の完成とその影響	
14	グローバル化の時代：多様な工業化への道	復習テスト④
15	グローバル化の時代：グローバル経済と戦後世界	

講義では大きな時代の流れと学習のポイントを解説する．受講者は講義を聞くだけでなく，講義の進度に合わせてテキストの指定箇所を読み進め，より詳しい知識を習得していく．

＜成績評価基準＞

期末レポート試験・論文	60%	提示史料の正確な解釈にもとづき，説得力のある立論ができているかどうか．
小テスト	40%	テキストや配布資料の理解にもとづき，的確な解答ができているかどうか．

＜テキスト＞

金井雄一・中西聡・福澤直樹『世界経済の歴史－グローバル経済史入門－』初版(名古屋大学出版会，2010) 368p. ISBN:978-4815806422

帝国書院編集部『最新世界史図説タペストリー』十一訂版(帝国書院，2012)336p. ISBN:978-4807159871「世界システム」論について，豊富なビジュアル資料を交えた分かりやすい解説がある．帝国書院『高等学校　世界史のしおり』2006年4・10月号，2007年1・4・10月号，2008年1月号掲載の桃木至朗「連載ゼミナール　グローバル・ヒストリー」は『タペストリー』冒頭の見開き地図をもちいて世界史の大きな流れを解説しているので，併読するとよい．

＜参考文献＞

水島司『グローバル・ヒストリー入門－世界史リブレット－』(山川出版社，2010) ISBN:978-4634349650 テキスト『世界経済の歴史』の巻末で簡単にまとめている「世界システム」などのグローバル・ヒストリーの基本概念について，より詳しい解説があるので参照されたい．

Jerry Bentley, Herbert Ziegler, Heather Streets Salter, Traditions & Encounters: A Brief Global History, 3版. (McGraw-Hill, 2013), 768p. ISBN:978-0073406978　本講義の内容は一部(とくに前近代)につき本書を理論的ベースとしている．

＜参照URL＞

帝国書院『高等学校世界史のしおり』 http://www.teikokushoin.co.jp/journals/history_world/
歴史研究者・世界史教員による世界史の大きな流れや時代背景，用語その他についての解説集．

Traditions and Encounters Online Learning Center　Traditions and Encounters Online Learning Center
参考文献 Traditions & Encounters(2nd 版)のオンライン学習サイト．MacGraw-Hillsのサイトに色々学習用ツールがある．

＜資料B＞大阪大学文学部文学研究科HP「社会連携/マスコミ取材/過去のマスコミ取材」（URL＝http://www.let.osaka-u.ac.jp/ja/research/community/hodo/2003_2012）

朝日新聞2006年12月16日夕刊（桃木至朗）	全国の大学の補習の取り組みと，阪大で翌年度開講予定の「市民のためのアジア史」「同ヨーロッパ史」についての紹介記事「大学２割で「高校補修」」
朝日新聞2006年12月7日夕刊（桃木至朗）	世界史未履修問題と地歴教育のあり方についてのインタビュー記事「高校の地理歴史　学ぶべきは何？」
読売新聞2006年11月17日夕刊（桃木至朗）	2007年度共通教育で開講予定の「市民のためのアジア史」「同ヨーロッパ史」についての紹介記事「阪大　高校世界史の講義」
読売新聞2006年11月23日朝刊（桃木至朗）	阪大が高校教員と共同で行っている歴史教育の研究会についての紹介記事「「歴史は暗記」イメチェン」
共同通信社，福井新聞ほか地方紙2010年9月28日（森安孝夫・桃木至朗）	「生きた「歴史」　学生は目輝く」と題して，8月に3日間連続で開催された大阪大学歴史教育研究会の大会の記事

＜資料C＞

（1）阪大東洋史「スパルタ式」の概要—目標の明確な積み上げ式カリキュラム

教養課程（全学）共通教育	「専門基礎科目」で「アジア史学基礎」のA（中央アジア史），B（中央アジア史），C（東南アジア史）すべて＋「中国古典演習」履修
2～3年年生	漢文講読（週2コマ）
2年生2学期～4年生1学期	3分野の学部生用英語講読のうち1つ（週2コマ）が必修
2年生～院生・ポスドク	**「合同演習」**　教員も全員集合
3年	論文の内容を紹介する「論文紹介」（出席者は全員その論文を読んでくる）
4年～	卒業論文・修士論文・博士論文などの準備発表やその他の研究発表
博士後期課程	**毎年4月，2年生向けに「東洋史学史」「漢籍入門」「工具書紹介」を講義**

－学部生は通常，英語講読を選んだ分野の演習・特殊講義（一部を除き学部生・院生共通科目），教員の研究指導を受け卒業論文を準備．大学院生も通常3分野のうち1つについて研究するが，複数分野の演習に出席し，広域の関係や比較をテーマにして博士論文を書く院生も徐々に増加

－漢文・中国語と英語以外にもフランス語，トルコ語，ベトナム漢文などの史料講読の授業を開講，漢文・英語・教養課程の第2外国語以外の外国語を外国語学部等で履修することを奨励

－中国史以外のテーマでも卒業論文は漢文史料だけを使って書いてよいが，先行研究は日本語だけでなく中国語・英語などの文献をなるべく参照するよう要求．修士論文以上では漢文以外の史料が必須で，中国語・英語以外で書かれた参考文献の利用も強く期待される．中国史の場合も修士論文以上では，漢文・中国語以外に英語の主要先行研究は参照しないと合格しない．

－きめ細かい個別指導による**「はみ出し」「やり直し」**：(a)留学や就職活動のため標準年限で卒業・修了できない学生への指導のほか，(b)中央ユーラシア，中国，東南アジア・海域アジアの3地域以外の地域や文献史学以外の研究を専門にする学生・院生が，特別な外国語や関連する他専攻・研究科のゼミ（例：経済学研究科のアジア経済史のゼミ）を履修するために東洋史学の必修科目を免除する，**(c)学部時代に相当する授業を履修していない他大学出身の大学院生に上記の学部（教養課程を含む）科目を履修させる**など，いろいろなケースに対応

（2）データでみる阪大東洋史※（年報2012，2010及び阪大東洋史教員の情報提供に拠る）

年報URL＝**http://www.let.osaka-u.ac.jp/ja/about/information/nenpo**

※1997年～世界史講座が「東洋史学」「西洋史学」（学部の「専修」，大学院の「専門分野」）に分かれる

○教員・研究員（2012年4月現在）：

教授3：片山剛，荒川正晴，桃木至朗　　准教授1：田口宏二朗　　助教1：赤木崇敏

学術振興会特別研究員4，ポスドク8

○在学生…学部生は1990年代よりは少ない，ほとんどの年に日本史・西洋史専修より少ない

年度	学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	大学院 研究留学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
2010	28	12	8	0	0	0	0	0	0
2012※	23	8	12	0	0	0	0	0	0

※うち留学生2名，社会人学生1名

○修了生・卒業生（2010年度～2011年度）

年度	学部卒業者	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者	出身の研究者
2008	8	3	2	0	0
2009	3	3	0	1	2
小計	11	6	2	1	2
2010	8	6	0	0	0
2011	3	2	0	4	0
小計	11	8	0	4	0

○大学院生等による論文発表等（括弧内は査読付き論文数）

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2008	2(2)	0(0)	0(0)	0(0)	4(0)	6(2)
2009	2(2)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	2(2)
小計	4(4)	0(0)	0(0)	0(0)	4(0)	8(4)
2010	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	6(0)	6(0)
2011	6(6)	0(0)	0(0)	0(0)	1(0)	7(6)
小計	6(6)	0(0)	0(0)	0(0)	7(0)	13(6)

○日本学術振興会研究員採択状況

2008年度　PD: 0名　　DC2: 0名　　DC1: 1名（計1名）

2009年度　PD: 0名　　DC2: 0名　　DC1: 1名（計1名）

2010年度　PD: 1名　　DC2: 0名　　DC1: 1名（計2名）

2011年度　PD: 2名　　DC2: 1名　　DC1: 1名（計4名）

○専門分野出身の高度職業人

2008～2009年度: 計6名（2008年度: 4名　2009年度: 2名）

＜内訳＞技術職0名　中・高等学校の教員1名　その他5名

2010年度～2011年度: 計6名（2010年度: 4名　　2011年度: 2名）

＜内訳＞技術職1名　中・高等学校の教員0名　その他5名

博士前期課程院生（近年，総数が減少気味）は修士号取得後アカデミア外での就職が多い.

＜資料D＞高齢者大学校・世界史から学ぶ科　2012年度講義スケジュール

1　オリエンテーション		向正樹
I　海域世界		
2　人間と海の関わりの歴史	陸上動物たる人間が海洋世界に進出した歴史，ことに南太平洋のポリネシア人の歴史を語る	片山一道
3　海の王者	モンスーン・インド文化・国家形成	岡田雅志
4　校外学習	国立民族学博物館	菊澤律子
II　ユーラシア諸地域の統合		
5　環境が織りなす文明	ユーラシア大陸の自然と歴史	坂尻彰宏
6　草原とオアシスの帝国	トルコ系遊牧民の系譜	齊藤茂雄
7　仏教のきた道	長安とユーラシア仏教文化	中田美絵
8　消えたシルクロードの国際商人	ソグド人の宗教と文化	影山悦子
III　ユーラシア世界の統合		
9　チンギス=ハンがつなげた世界	ユーラシア交易圏の完成	森新太
10 校外学習	龍谷ミュージアム	影山悦子
11 海を渡った鎌倉時代の日本人	日本と宋・元の貿易・僧侶の交流	中村翼
12 高大白熱教室	世界史のなかの日本	後藤敦史
13 アジアにあこがれるヨーロッパ	ユーラシア交易圏とヨーロッパ	中谷惣
IV　一体化する世界		
14 ヨーロッパの世界支配への道	近代世界システムと覇権国家	山下範久
15 ポスト=モンゴルのユーラシア世界	ユーラシア統合を実現したモンゴル時代と１４世紀の危機，１５・１６世紀のグローバルな交通・交易の拡大	向正樹
16 日本列島と硫黄の道	ユーラシア交易圏と日本列島	山内晋次
17 アジアの海の十字路	琉球と蝦夷地	中村翼
18 交易の時代の東南アジア	東南アジア社会の変貌	岡田雅志
19 長江下流域の近世	海洋世界と地域社会	濱島敦俊

20 校外学習	大阪市立東洋陶磁美術館	小林仁
V　近世から近代へ		
21 オスマン朝とヨーロッパ—互いを造りしもの—	オスマン朝とヨーロッパの政治的関係，文化的関係を追いながら，互いに相手に及ぼした影響を考えたい	新谷英治
22 高大白熱教室	ヨーロッパとアジアはいつ「分岐」したのか？	桃木至朗
23 東北・東南アジアの小帝国群	国家統合と伝統社会の成熟	上田新也
24『蒼穹の昴』の世界	大清帝国の苦悩と変容	山本一
25「鎖国」と「開国」	欧米列強とアジア諸国の選択	後藤敦史
26 植民地とはなんだったか？	仏領インドシナの経験	岡田友和
VI　身近なテーマの世界史		
27 スポーツの世界史	身近なテーマの世界史①	鍵谷寛佑
28 ジェンダーから世界史を読み替える—フランス革命を中心に	身近なテーマの世界史②	三成美保
29 大衆文化の世界史	身近なテーマの世界史③	杉本淑彦
30 観光の世界史	身近なテーマの世界史④	森本慶太
31 能力主義の世界史	身近なテーマの世界史⑤	水田大紀

一口レポート

実　施　日：　2013 年9月5日　　科 目 名：8. 世界史から学ぶ科

講座テーマ：一体化する世界①13～17 世紀「移行期」を考える

講 義 者：**向正樹（同志社大学グローバル地域文化学部准教授）**

- １３C～１７Cの世界情勢の大筋がよく分りました．今後の授業が楽しみです．
- 今日の講義，大変興味深く受講しました．
- 今日の講義は雑他すぎた．泡の様な歴史に関する諸学説を聞いても何の関心もない．諸先生も大変である．
- 世界史の流れを見る一つの見方を示してもらったと思う．楽しく聞かせてもらいました
- 歴史の移行してきた内容が比較的理解出来た．
- 駆け足の内容だったが，中世～近世の経済関係の流れがわかり参考になった．
- 長い歴史の中で日本は影が薄い．この先世界に向けてどのような発信ができるのか？
- 中世の世界の移行の流れが大まかにわかった．
- 世界の大きな流れの見方が少し分ったような気がしました．
- ポスト モンゴルに，ユーラシア大陸の東端，西端に巨大な帝国が誕生したことは興味深い．
- 13 世紀以降の世界の大きな流れをいっきに話されていて，今後の授業が楽しみになりました．
- 世界史の観方，よく理解出来ました．
- 今日の中国は世界的に実力をつけ，朝貢システムを復活しつつある．

＜参考文献＞

1) 大阪大学大学院文学研究科文化動態論堤研究室(編集・発行)『最新の研究成果を歴史教育につなぐ教材・教授資料の研究開発』（平成20-22年度科学研究費補助金・基盤研究(B)・課題番号20320094）研究代表者：堤一昭，2009，77p.【2008年度に大阪大学文学研究科大学院生による模擬授業後に提出されたレポートにもとづく論考「大航海時代について」「ロシア前史—ユーラシア帝国ロシアの成立—」「海域アジアにおける日本人」などを掲載】
2) 大阪大学歴史教育研究会(編集・発行)『大阪大学歴史教育研究会　成果報告書シリーズ 7—最新の成果にもとづく大学教養課程用世界史教科書の作成』(平成23-25年度科研費補助金・基盤研究(A)・課題番号23242034）研究代表者：桃木至朗，2012, 305p.【2011年度大阪大学歴史教育研究会院生グループ報告（「暦から見る世界史—社会との関わりをとおして」「歴史人口学からみた日本の歩み」「身体観の東西—伝統的身体観とその変容」），科学技術・環境・ジェンダー関連記述および用語リスト，2011年度活動記録など掲載】
3) ————(編集・発行)『大阪大学歴史教育研究会　成果報告書シリーズ 6—「阪大史学の挑戦2」—最新の研究成果にもとづく大学教養課程用世界史教科書の作成』(平成23-25年度科研費補助金・基盤研究(A)・課題番号23242034）研究代表者：桃木至朗，2012.【向正樹「詳しく学ぶ世界史教材　モンゴル時代の世界の一体化と交易ネットワーク」（pp.17-44）；向正樹, 伊藤一馬「中央ユーラシア史用語リスト解説」（pp.45-51）他掲載】
4) ————(編集・発行)『大阪大学歴史教育研究会　成果報告書シリーズ 5—「阪大史学の挑戦2」—最新の研究成果にもとづく大学教養課程用世界史教科書の作成』, 2011.【2010年8月9日～11日に大阪大学・中之島センターで開催された、大阪大学歴史教育研究会大会「阪大史学の挑戦2」の「第2部　中央ユーラシア史の枠組みの理解に向けて—スキタイ・匈奴からムガル・清帝国までの国家の基本構造とシルクロードの展開」ほか各部会で配布された資料を掲載】
5) 佐藤貴保「大学・高校の専門家の協働による歴史教育の刷新にむけて—第4回全国高等学校歴史教育研究会を振り返って—」桃木至朗(責任編集)・佐藤貴保(編集)『大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」研究報告書2004-2006 第4巻 世界システムと海域アジア交通』大阪大学大学院文学研究科, 2007, pp.115-216.
6) 羽田正(編著)，伊藤幸司，榎本渉，岡美穂子，岡元司，佐伯弘次，杉山清彦，中島楽章，橋本雄，藤田明良，向正樹，森平雅彦，山内晋次，山崎岳，四日市康博，渡辺美季(著)『東アジア海域に漕ぎだす1　海から見た歴史』東京大学出版会，2013, 304p.
7) 向正樹「高大連携のあたらしいかたち—大阪大学『歴史教育研究会』の射程—」『世界史のしおり』2008年1月号, pp.14-16.
8) 向正樹「大阪大学歴史教育研究会の活動」『歴史科学』197(2009), pp.25-30.
9) 向正樹「＜世界史Q&A＞中央ユーラシアとは何か」『世界史のしおり』2011年1学期号, p.16.
10) 向正樹「モンゴル帝国の海上進出を読み直す」『ふびと』64(2013)，pp.21-44.
11) 向正樹「モンゴル・シーパワーの構造と変遷－前線組織からみた元朝期の対外関係－」　秋田茂・桃木至朗編『グローバルヒストリーと帝国』大阪大学出版会，2013，pp.71-107.
12) 桃木至朗「歴史学の危機と21世紀の挑戦」桃木至朗(責任編集)・佐藤貴保(編集)『大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」研究報告書2004-2006 第4巻 世界システムと海域アジア交通』大阪大学大学院文学研究科, 2007, pp.9-34.
13) ————『わかる歴史・面白い歴史・役に立つ歴史—歴史学と歴史教育の再生をめざして』（阪大リーブル013）大阪大学出版会，2009, p269.
14) 矢部正明「中央ユーラシア史用語解説試案—本当に必要な用語とは？」『世界史のしおり』2011年度2学期号，pp.13-15.

コメント：高校教育の現場から

2013.11.8

大西　信行（中央大学杉並高等学校）

はじめに～自己紹介にかえて～

・報告者について
　大学時代の専攻は日本史、勤務校でも日本史を主に担当
　学生時代、海域アジア史に興味→アジア史の面白さを知り、迷走
・勤務校について
　中央大学の附属校、毎年95%の推薦枠→消化しきれず数名を返上することも
　「大学受験」を突破するための「暗記一辺倒」の授業では無意味だし、そもそもついてこない
　一方で大学教育に必要な基礎知識をつけてほしいという要請
　　→受験をモチベーションとせずに授業内容で生徒を引きつける工夫が必要

1　アジア史の不人気

・３年生対象の選択授業「アジア史」がなかなか開講できない
　現２年に希望調査→結果２人（！）→不成立
　毎年開講の提案はしているが、最後に開講できたのは2010年（報告者が担当）
　　※勤務校のカリキュラム　必修の世界史：２年２単位（近代中心）、３年文系のみ２単位（前近代中心）
・文学部史学系専攻へ進む生徒がなかなか現れない

2　アジア史の全体像と世界史Ａ

・歴史研究と教育の不幸な関係（アジア史に限らない）
　個別研究の深化→これまでのラージセオリーや一般論が通用しない
　　その代替は？　教育関係者だけでは作り上げていくことは難しい
　　→新たな研究が教育の現場に広まらず、ぼろぼろになった古い枠組みが語られ続ける
　研究を志す学生向けに書かれた『海域アジア史研究入門』は、高校教員にもありがたい
・世界史Ａ必修化の悲劇(2003年度入学生より)
　中学社会の歴史がほぼ「日本史」に
　　→高校では中学での学習内容を前提として、「日本史」と関連づけつつ世界の歴史を学ぶ
　世界史Ａ＝「世界史」と「日本史」をつなぐ可能性のある科目であり、
　　自然環境と人間の活動など、新しい視点を盛り込む可能性のある科目
　しかし、実態は「世界史Ｂの前半だけ」など、指導要領通りにおこなわれていないことも多い
　理由＝１）授業のモデルが見えない
　　２）大学の入試科目にならない（2013年度センター試験受験者543,038人中、世界史Ａは1,491人）

3　漢字文化・教養の解体の実例

・「郡県制」「郡国制」が正しく書けない→「群県制」「群国制」という答案が各クラスに数名ずつ
　なかには「採点ミスではないですか？」とクレームをつける生徒も
　　→本当に「郡」と「群」の区別がつかない＝出題にあたって想定外だった事態
　　地方行政区画としての「郡」の無実化
・これまでの経験からは予想できない知識をもつ生徒／学生を指導していくことに

（参考）高等学校学習指導要領　世界史Ａ

１目標

近現代史を中心とする世界の歴史を諸資料に基づき地理的条件や日本の歴史と関連付けながら理解させ，現代の諸課題を歴史的観点から考察させることによって，歴史的思考力を培い，国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う。

２内容（一部の項目のみ抜萃）

(1) 世界史へのいざない　ア 自然環境と歴史　　イ 日本列島の中の世界の歴史
(2) 世界の一体化と日本
　イ 結び付く世界と近世の日本（引用者註：16～18c）　エ アジア諸国の変貌と近代の日本（引用者註：19c）
(3) 地球社会と日本

2013年11月8日日本教育会館
東方学会平成25年秋季学術大会シンポジウムII
「高大連携で取り組むアジア史教育の再建」：コメント

「大学と高等学校における歴史教育の非連続とその歴史文化的背景」

佐藤正幸（山梨大学）

（1）はじめに

２１世紀の日本に住んでいる私たちは、世界的に見ると大変ユニークな歴史教育のシステムをもち、またそのようなシステムを支えている歴史文化の中に生きている。本稿では、日頃私たちが実践している歴史教育を、メタ・ヒストリカルな視点から検討してみたい。

現在日本の高等学校における歴史は、日本史と世界史の二つの科目に分かれ、地理歴史科という教科の一部を構成している。１９９３年までは、社会科という教科の一部であった。

社会科にせよ地理歴史科・公民科にせよ、これらは大学にはない高等学校だけの教科名称である。科目も大学にはない科目名称が使われており、世界史は高等学校にしか存在しない科目名称である。つまり、名称に関しても内容に関しても大学と高等学校との間には一貫性がない。そのような状況の中で高等学校ではどのような進路指導が行われているのか。

高等学校で日本史・世界史を学んで歴史が好きになった生徒が、大学で歴史を専攻したいと進路指導の先生に相談に行った場合、大部分の先生は文学部史学科への進学を進めているようである。その理由は歴史を教える先生の多くが文学部の史学科出身だからである。そして、文学部の史学科では世界史が東洋史と西洋史に分かれているので、日本史・西洋史・東洋史のいずれかを専攻することになるという指導が行われる。

この進路指導に関して私は、昔から疑問に思ってきた。その理由は、日本の大学においては、歴史は文学部史学科の独占物ではないからである。

政治史を勉強したい生徒は、法学部の政治学科への進学が最適である。経済史を勉強したい生徒は、経済学部で経済史を専攻するのが一番良いであろう。経営史や商業史を専攻したい生徒は商学部に進学するのが良いし、科学史を専攻したい生徒は理学部に進学するのが相応しい。一方で、法制史は法学部でなければ専攻できないし、医学史は医学部でなければ専攻できない領域である。

これ以外にも、教員養成学部で歴史を専攻することが可能である。日本各地の教員養成学部には社会科専攻があり、この中に教科専門コースとして歴史専攻が設けられている。

なぜ大学では歴史研究がこのようにバラバラに行われているかというと、日本の大学には歴史学部がないからである。世界中の多くの大学は、専任教員が50人—100人規模の歴史学部という学部組織を持っているが、日本の大学にはなぜか歴史学部が存在しない。文

学部の中に学科としてしか存在していない。そして政治史は法学部で、経済史は経済学部で教育・研究が行われている。

大学で歴史を勉強したいという生徒は随分多いと思うが、その生徒たちが事情を知らずに、歴史を勉強するには文学部史学科に進むしかないと思いこんでいたとしたら、それは不幸なことである。特に、将来自分は専門の政治史家・経済史家になりたい、と考えている生徒にとっては、事情は深刻である。

このようなトラブルの出発点は、高校と大学の間に学問的な連結がないという事実に由来する。ではなぜこのような状態が１９４７年以来６０年以上にわたって続いているのか。

（2）国によって違う歴史の枠組み

外国の大学の歴史学部について紹介したい。欧米の大学で歴史学部のない大学はまずない。歴史学部は大所帯で、政治史・経済史・文化史・社会史あるいは医学史・科学史など全部包み込んでいる。西洋・東洋・自国というように地域で分割しているところは少なく、ほとんどが政治史・経済史・社会史といった分類方法をとっている。学問対象を地域で分類する方法があるが、これは昔の植民政策の名残である。イギリスの大学には日本や中国といったアジア地域を研究対象にするオリエント学部があり、日本や中国の歴史は歴史学部での研究の対象になっていない。これは日本や中国に「歴史がない」と言っているのではなく、自国の歴史の展開にあまり関係のない国は、彼らの「歴史」という範疇の中には入っていないからである。

それは小・中・高等学校の歴史教科書にも反映していて、例えばイギリスやスウェーデンの歴史教科書には２０世紀になるまで日本は登場しない。２０世紀になるまで、自国の歴史の展開にとって日本はほとんど関係がなかったからである。

この事実から、これらの国の歴史教科書が偏っていると責めるのは筋違いである。これは、日本の世界史教科書に南アメリカやアフリカの歴史がほとんど取り上げられていないのと同じである。世界史教科書は客観的に世界の歴史をカバーしているはずだと考えがちであるが、実は「日本人の日本人による日本人のための世界史」以外の何ものでもない。

１９９７年にロンドンで「世界史とは何か」と題する国際会議があり、私は「日本の世界史」について講演したが、世界各国からの報告者の話を聞いていると、全てが全て自国中心の世界史であって、全世界が共有するような世界史など不可能であるということを思い知らされた経験がある。結局「日本人はこのような世界史の枠組みをもっている」「フランス人はこのような世界史の枠組みをもっている」ということを互いが承知しておくということしか、相互理解の方法はないのではないかというのが、これまでの私の経験から得た結論である。

１９４９年に世界史が高等学校の必須科目になったときの理由は、世界史を学ぶことが国際人の必須条件になるからだというものであった。しかし、私たちが教科書を通して学ぶ世界史は日本人だけの世界史にすぎないことを生徒に同時に伝えなければ、逆に独善的

な先入観をもった国際人をつくることになってしまうことを銘記しておく必要がある。

（3）歴史学部の存在は学問としての歴史を教える必要条件である

私は歴史理論・歴史哲学を学ぶために、日本の大学では経済学部で経済史を、文学部哲学科で歴史哲学を、文学部史学科で歴史理論・史学史を専攻した。その後でケンブリッジ大学歴史学部の大学院に留学した。その時最初に思ったことは、もし学部段階からこの歴史学部に入学していたら私は日本の大学で学部学科を３つも移り歩く必要はなかったということである。なぜなら、歴史学部の中に私が勉強したかった科目が全て準備されていたからである。

特に重要なのは歴史哲学・歴史理論・歴史学説史といったメタ・ヒストリー関係の科目が歴史講義の中心を占めていたことである。経済学部では経済哲学・経済理論・経済学説史といったディシプリンとしての経済学の根幹をなす科目を必ず学ぶ。これと同じように、歴史を学ぶ学生は「歴史とは何か」といった科目を必ず学ぶわけである。

しかし日本の大学には歴史学部という組織が存在しないので、このようなディシプリンとしての歴史学をきちんと教える教師もいないし科目も存在しない。文学部の史学科の授業科目を見ると「史学概論」という科目がどこの大学でも必ずあるが、数人の先生が持ち回りで教えるところが多く、専門家を擁している大学はない。歴史哲学・歴史認識・歴史学説史といった基幹科目はカリキュラムにすら入っていない。

学部組織がないということは、その学問の存在意義を考える機会を学生がもてないということである。だから学生はただひたすら古文書の読み方を訓練させられたり、英語やドイツ語の原書講読をさせられたり、アラビア語や漢文の原典講読をさせられたりして教育を受けている。これが現在の学生たちの「歴史離れ」を引き起こしている一因ではないかと私は考えている。

大学の一般教養の科目から歴史が減少して文化人類学とか社会人類学といった別の科目に置き換わっているのが、２１世紀初頭の日本の大学の現状である。歴史不人気の理由として私が考えるのは、大学の歴史教授は重箱のスミをつつくような研究を専ら得意とし、本人はそれで面白いのかもしれないが、学生たちはそのような話にうんざりしているからである。この解決法としては、日本の大学に歴史学部を設置して歴史哲学・歴史認識・歴史学説史といった根本科目を設置し、ディシプリンとしての歴史を体系的に教えること以外にない。

ケンブリッジ大学留学中興味深かった経験は、日本人の留学生で私と同じ歴史学部に所属していた人たちが、日本の大学では法学部で政治史を専攻したり経済学部で経済史を専攻していたりしていた人たちだったということである。しかし日本に帰ってくると皆それぞれの学部に戻ったので、その後はほとんど行き来が無い。日本の大学に歴史学部がないということは、ひとつの学問体系を構築できないという大きな問題を内包しているといわねばならない。

大学で歴史の研究をしたい、出来ればそれを職業にしたいという意欲のある高等学校の生徒に対しては、文学部だけでなく法学部や経済学部へ行くことを進めてみることも重要である。生活文化や風俗習慣などに焦点を当てた社会史がここ４０年歴史研究の流行となっているが、世界の歴史研究を見渡してみるとやはり政治史と経済史がその主流をなしている。

（4）歴史教育ではなぜ現在を教えないのか

つぎに日本の歴史教育と欧米の歴史教育を比べて決定的に違うところは、日本の歴史教育では現代をほとんど教えないということである。

国際歴史教育学会は毎年秋に年次総会を開催するが、１９９９年の秋の会議では、「１９９０年以降の歴史をどのように教えるか」に関する国際シンポジウムをミュンヘンで開催し、私は日本の歴史教育について講演を行った。

その時調べた日本の中学校歴史教科書では、東西ドイツ統一・ソヴィエト崩壊後の取り扱いは３００頁程のうち数ページしか割かれていないことを話し、実際には１９６０年以降の歴史は、授業ではほとんど教えられていないことを付け加えた。

質疑応答ではなぜ現代史を教えないのかに質問が集中した。私は、日本人にとって歴史教育とは出来上がったストーリーを古代から順を追って教えることであり、現代は歴史として評価が定まっていないので歴史教育の対象とは考えていないからだと答えた。

なぜこのような質問が多かったかというと、世界的な共通理解では歴史教育の第一目標は今ここにある世界はどのような経緯で現在のようになってきたのかを時間的継起の中で子どもたちに教えることだからである。欧米の歴史教育では、ソヴィエト崩壊後の世界の変化が現在の歴史教育で一番重要でかつ必要不可欠なトピックであり、何をさておいても教えなければならない歴史なのである。

欧米の現在を知る手段としての歴史教育に対して、日本の歴史教育のスタンスは検定済教科書に記載された揺るぎない歴史事実と歴史のコースを記憶することにある。

このような「権威がつくる過去」という発想のルーツは、新王朝は前王朝の歴史を編纂しこれを正史とするという中国の歴史編纂の伝統にあり、実は、東アジア諸国が千年以上にわたって共有してきた歴史叙述の伝統なのである。『日本書紀』以降『大日本史』に至るまでの日本の歴史編纂は、その模倣であるといっても過言ではない。そして現行の歴史教科書検定制度は、国家が過去を管轄するという意味で正史変形したものであるということが出来る。都道府県単位で現在盛んな地方史編纂も正史の変形したもののひとつであることは間違いない。

ほとんどの日本人にとって第二次世界大戦以後の歴史知識は、テレビや新聞・雑誌などで断片的に仕入れた知識の寄せ集めにすぎない。しかしこれからの国際社会で生きてゆく日本の若者に最も必要なのは、しっかりとした現代史の知識である。ではどのようにしたら学校で過去１０年くらいを歴史として教えることが可能だろうか。

現代史に関しては教科書ではなく史料集を使うとか、或いは歴史教科書を自由発行にすること以外方法はないであろう。その理由は、検定制度がある限り歴史教科書は外国からみれば「準正史」にしか見えないからである。そして現代史に関する国家としての公式の歴史叙述など、事態が流動的すぎてどう考えても不可能だからである。

実際世界の多くの国々では、自由発行の教科書・史料集を使うことで現代史に重点を置いた歴史教育が行われている。

繰り返しになるが、欧米諸国では、今現在に直結する時代を研究したり教えたりするのが歴史なのである。今現代がどうしてこうなったかを過去からの経緯で子供たちに理解させることが歴史教育であって、懐古趣味の古代史は学校教育の主たる対象ではない。子供たちが現実世界を生きてゆくのに必要なのは、社会に出て今の時代がどうしてこうなっているのかということを１０年前からの時間的継起の中で理解していることであり、そしてそれを教えるのが歴史教育である。

日本の大学の文学部史学科の先生で最も現代に近い研究をしている人でも、１９５０年代、１９６０年代くらいまでであろう。それに反してアメリカでは「クリントン政権における経済政策について」というテーマで論文を書いている歴史家が既にいるのではないかと思う。クリントン時代というのは、我々日本人の感覚では、経済学者や政治学者が扱う時代だと思うかもしれないが、アメリカやヨーロッパでは、これは歴史家が最も関心を注いでいる研究領域なのである。

歴史教育というものは実はその国の歴史研究と一体化している。日本の歴史家の資質あるいは態度が日本の歴史教育のあり様とよく似ているのと同じで、ヨーロッパやアメリカでは歴史家の仕事のスタイルと同じ様なことを、欧米の小・中・高校の歴史教育では行っている。これは双方の影響関係というより、このような歴史研究と歴史教育を包摂している歴史文化的背景が同じだからだといえるのではないか。或いは、ひとつの歴史文化が歴史研究と歴史教育という別な形式を纏って顕在化していると言った方がよい。

高等学校の歴史教育の現在のあり方は、大学入試のために暗記中心の科目にならざるを得ないからだというという強い意見がある。もちろんその通りであるが、考えてみれば、この大学入試の出題形式自体がまさに日本の歴史文化・教育文化の表出形態のひとつなのだということが出来る。

（５）教科書解説かディスカッションか

歴史の授業自体がどのくらい違うか、欧米の学校と日本の学校を比べるのはとても興味ある比較である。

以前アメリカのイリノイ大学歴史学部で歴史文化の講義をしていた頃、講義を始めると５分もしないうちに学生は質問をはじめる。私が答えると、さらに自分の考えを述べはじめる。話を聞いていて感ずるのは、歴史とはある一定の材料をもとに自分の頭で考えて議論を組み立てることだと考えていることである。これに対して日本の大学では、学生はき

ちんとノートをとって１時間でも２時間でも黙って座って聞いている。質問などまずない。

６年ほど前、イタリアのローマ大学歴史学部で講演をした時のことである。原稿を前もって送ってくれといわれたので電子メールで送った。講演当日は１５分で講演内容を要約して話し、残りの２時間は質疑応答にあてるという。

この講演形式について、彼らはつぎのように考えている。私が用意した原稿を読み上げるだけなら、ビデオテープを送ってもらえばすむことだ。なぜはるばる日本から招待するかというと、生身の私と生身の学生がひとつの講義室にいて、彼らが知りたいことを質問してもらって私はそれに答えるために呼ぶんだ、というわけである。外国の大学で講義をする時には、昔は講義そのものにウェートをおいて準備したが、最近は２０－３０分話してあとは質問に答えるようにしている。想像もしない、突拍子もない質問が出たりして知的充実感に満ちた時間である。優秀な学生というのは記憶力が優秀なのではなく、自分の頭で考え自分でそれを相手に分かるように表現できる能力を持った学生なのだ。

英語のほめ言葉に「グッド・クエスチョン」というのがあるが、このような教育理念の文脈にこのほめ言葉をおいてみると、その重要さがよく分かる。私は海外で行われる国際会議に２００回以上出席して論文を発表したり講演をしたりしてきた。最近では海外から歴史家を招待して日本で国際会議を主催することも多くなったが、このように頻繁に会議を開く目的は相互のディスカッションにあるのである。欧米の学問文化はディスカッション文化と言っても過言ではない。

これに対して日本では記憶力が一番であり、大学入試も記憶力を問う。どうも私たちの文化は根本的に違う文化なのかもしれない。２０００年５月に国立台湾大学から講演に招待され、私は「歴史是一種文化基礎一比較史学史的新視野」と題する講演を行った。１時間の話を学生たちがノートを取りながら黙って聞いているのは、日本人の学生と同じである。質疑応答では、教授たちから質問が出たくらいで、学生からは何の質問も出なかった。私が質問しても、答えはほとんどなかった。しかし講演終了後、学生たちは質問のために次々と講演台に上がってくる。これは日本人の学生と同じ行動様式であり、公の場で質問したりディスカッションをしたりするということは、あまりしないようである。実は、北京や上海の大学でも、またソウルの大学でも私はこれと同じ経験をしている。東アジアにおける大学生には共通した行動様式があるのだ。

日本とイギリスの歴史教育の比較研究をケンブリッジ大学の同僚と１０年ほど行ってきたので、イギリスを例に取り上げて紹介したい。イギリスの大学入試の歴史問題を見ると、例えば「第２次大戦後の労働党政権の外交政策について記せ」といった問題が提出され、これについてＡ４サイズのレポート用紙２，３枚に答えを書かせるといった形式の論文問題が多く出題される。もし日本でこのような出題をしたら、採点基準を示せ・模範解答を示せという意見が出てきて恐らく収拾がつかなくなることは間違いない。この背景には「卒業試験よりも入学試験を重要視する」という日本独特の学校文化があるからだと考えている。

この入試システムを別な面から考えると、イギリスでは大学入試の段階で、歴史を学びたい生徒は歴史論文を書く訓練を始めているということである。彼らが使う受験参考書は、歴史を専攻する日本人の大学４年生が卒業論文準備のために読む原書である。入学の段階で日本の大学の文学部史学科卒業生と同じくらいの訓練を受けてきていると言える。大学に入ってからは、これを発展させて歴史論文を書く訓練を受けるのであるからその卒業論文の出来映えは見事である。

日本の高等学校では歴史知識を覚えることが主体である。記述試験といってもせいぜい３行か４行の文章を書かせるだけにすぎない。大学に入ってから歴史論文を書く訓練を初めても、それが自分に向いていない学生は悲惨だと思う。高校生の時に歴史研究者に向いているかどうかはいっさい考慮されておらず、歴史知識の記憶量だけで「歴史好き」を決めてしまうからである。

私が海外の歴史家と一緒に仕事をしていて、いつも太刀打ちできないと感ずるのは、文章を書く能力である。欧米では文章能力がある人間が歴史家になるし、文章能力のある学生が歴史学部に入ってくるのだ。

以上の議論をまとめると、歴史教育に関して言えば欧米では高校と大学とが要求する能力が一貫しているのに対して、日本では高校と大学とで歴史に要求する能力が異なるところである。日本の高校では記憶力が優れていれば大学入試の歴史では高得点がとれる。ところが大学では文章力があって卒業論文が書ける能力が要求される。高等学校では、入学後に要求される能力を考えながら歴史を専攻したい生徒の進路指導をしないと、大学に入ってから本人が悩むことになる。

（６）なぜ歴史は暗記科目のままなのか？

私は仕事柄、公開授業や研究授業を見に行くことがよくあるが、学校の先生たちは、なかなか普段の教科書解説型授業を見せてくれない。ほとんどの場合グループを作って調べさせ、話し合いをさせ、発表させるという形式の授業を見せてくれる。

教師がこのグループ型ディスカッション授業を理想の教育と考えていることが強く伝わってくる。この授業スタイルは１９４７年に社会科という教科が誕生すると共に教育現場に入ってきたものである。それから６７年経過したが、実際問題として日本の学校にはなかなか馴染んでいない。

私はこの授業スタイルを「理想の歴史授業スタイル」と考えること自体が間違いなのではないかと考えている。分厚い歴史教科書を中心に、歴史年表と歴史地図を横に置きながらその解説を軸に授業を進めることが恐らく日本の歴史教育の元型ではないかと思う。

欧米型のディスカッション型授業を目指しながらも、それが根付かない理由はなぜかを考えてみたい。私は「歴史」のもつ役割が、日本を含む東アジアと欧米とでは全く異なるからだと考えている。もう少し敷衍してこの違いを説明したい。

日本とイギリスの歴史授業の比較研究を１０年行ってきた結果明らかになったのは、両

国の教育観には根本的な違いがあるということである。普段の授業を見ていると、イギリスの歴史教師は生徒とディスカッションばかりしているのに対して、日本の歴史教師は教科書の解説を専らおこなう。

この違いは驚くほど顕著であり、ここにはそれぞれの国民が学校教育に求めるものの違いが反映しているのである。イギリスの大学入試はディスカッションをベースにした論文試験であるが、日本の大学入試は歴史知識の量を求めている。であるからもともと異なった教育文化風土に異質のものを移植しようとしても、それが根付かないのは当然だといわねばならない。

サッチャー政権時代にイギリスでは教育改革が行われ、生徒にしっかりした歴史教育を授けなければいけないという考えのもとに、日本の教育方法も参考としながら歴史知識教授に重点を置いた新しいカリキュラムが導入された。しかし改革後のイギリスの学校を訪ねて授業を参観しても、教室での歴史授業スタイルは昔と少しも変わっていない。知識獲得型授業は、彼らの教育風土にとってはなじまないもののようである。

いったいなぜこのような違いが出てきたのかについて、私の考えを紹介したい。それぞれの文化の核には、その文化にとって絶対確実で無謬で揺るぎないものと常に変化して止まないものとが、バランスをとりながら存在しているのではないかというのが私の視点である。

多くの文化ではその唯一確実で無謬なるものを宗教に求めている。特にユダヤ教・キリスト教・イスラム教に代表される唯一絶対の神を信ずる啓示宗教では事情は大変はっきりしている。これに対して日本を含めた東アジア文化はこの啓示宗教をもっていない。東アジアでは、この唯一確実で無謬なるものを歴史に求めてきたのではないかと私は考える。過去の人間の行為を記した歴史を厳粛で確実なものとする歴史文化をつくり上げてきたのである。

これに対して欧米では、歴史は常に新しく解釈し直され、新しい資料の出現によって今までとは違う過去像が次々に提出されてきた。ヨーロッパで歴史研究が始まったのは１６世紀の終わりのフランスである。この歴史研究は１９世紀のドイツで学問として花開いた。前の時代の人たちと違う見方で過去を見直すことが、それ以来歴史という学問の変わらぬ性格となったといえる。

一方東アジアでは、歴代の王朝の神聖な義務として自分たちが滅ぼした前王朝の歴史を、権威ある歴史家を集めて完成させ、完成した暁にはこれを正史として「唯一の過去」をつくり上げてきたといえる。いったん完成すると史料は廃棄される。そうすることによって、何人たりともできあがった過去についての新しい解釈や歴史像を提出することは出来なくなる。こうすることで、確定した歴史を文化の核として位置づけることが出来たのである。

この歴史に対する考え方は日本の歴史編纂にも影響し、韓国でもまたベトナムでも国家が歴史の編纂に深く関与して来た。この伝統は現在でも続いている。例えば韓国では１９４６年に政府が国史編纂委員会を設置して歴史編纂を始め１９７９年には『韓国史』全２

５冊が完成した。日本では、明治政府が太政官に修史局をつくり『大日本史』の編纂を継続しようとしたが、これはうまくいかなかった。しかし、地方行政機関による歴史編纂は盛んで、４７都道府県の殆どが歴史編纂を行ってきた。

地方史が正史と同じ発想に基づく確固たる歴史づくりのひとつだとすれば、国が編纂したり検定したりする歴史教科書は正史の教育ヴァージョンということが出来る。日本と同様中国も韓国も歴史教科書づくりには国が深く関与している。国家が関与した歴史教科書をつくって、自国の「正しい歴史」を未来の自国を担う青少年に教えているといえる。ちなみに欧米諸国では、歴史教科書づくりに政府はほとんど関与していない。

興味深いことに、国家が自国の過去の管理に全権を振るっているのは中国・韓国・日本といった東アジアの国々と、旧共産主義国家だという事実である。どちらも国家という存在がその文化の中で最高の地位を占め、国家を超越した存在である啓示宗教を持たないという点で共通している。

（7）歴史教育における認識と規範

第二次世界大戦後の日本は、「様々な過去の解釈」という欧米生まれの歴史研究方法を積極的に取り入れ、過去に対する新しい解釈を研究することが歴史家の生き甲斐のようになった。現在の歴史家の殆どはこの欧米流の歴史研究の流れに属している。そして、このような歴史家たちが同時に地方史の編纂にも携わっている。

つまり、現在の日本にはふたつの全く違う歴史叙述・歴史研究のルーツがあって、そのふたつが併存しているということである。この相異なる歴史に対する態度の違いは、「認識行為としての歴史」と「規範形成としての歴史」という言葉で表現するのが最適である。

東アジアにおいては、歴史とは政治的・社会的・文化的規範を作り上げるものである。だからひとつの歴史書の形式が出来上がると、それをフォーマットとして千年以上にわたって同じスタイルの歴史叙述が続いてきた。それらの形式が遵守され、王朝・政府という最高権威の名のもとに編纂が行われたのは、まさにこれらが人間の規範を形成するためであったからではないだろうか。

これに対してヨーロッパの歴史研究は、１６世紀以降その当時の諸学問に対抗して自己を作り上げようとしてきた新興学問である。そして同時代の出来事をその時間的契機の中で理解しようとする新たな「認識方法」をつくりあげてきたのである。

この二つの相異なるルーツを持つ歴史が現在の日本には併存している。歴史叙述における認識的要素と規範的要素は、どこの国の歴史研究においても多かれ少なかれ併存しており、この二つの要素が絡み合いながらそれぞれの歴史文化がつくられている。やや図式的な表現ではあるけれども、小・中・高校の歴史は「規範形成のための歴史」に重点が置かれており、大学で教える歴史は「認識としての歴史」に重点が置かれていると言える。

高等学校の歴史教育は教科書という形で規範的歴史学を学ばせながら、同時に新しい歴史の見方や解釈の仕方といった認識的歴史学にも言及しなければならない。大学の歴史教

育は現在ではほぼ完全に認識的歴史学になっているので、高等学校の歴史教育は、この橋渡しをせざるを得ない状況に置かれているということが出来る。

2013年11月8日

東方学会シンポジウム「高大連携で取り組むアジア史教育の再建」
コメント：漢文の素養という角度から

大阪大学コミュニケーションデザイン・センター
合山 林太郎（goyama@let.osaka-u.ac.jp）

Ⅰ はじめに-自己紹介-

1. 専門は幕末・明治期の日本漢詩文
2. 文学研究科（文学部）と兼任、所属は日本文学（日本文学・東洋文学講座）
3. 東洋史、中国哲学、中国文学などとは異なる環境

Ⅱ 現在の日本漢文学に関する研究・教育の状況

1. 理想化される漢文の素養、知の基盤としての漢文のイメージ（湯川秀樹の素読体験）
   （ア）しかしある日、――私が五つか六つの時だったろう――父は祖父に、「そろそろ秀樹にも、漢籍の素読をはじめて下さい」と言った。（略）まだ見たこともない漢字の群は、一字一字が未知の世界を持っていた。それが積み重って一行を作り、その何行かがページを埋めている。するとその一ページは、少年の私にとっては怖ろしく硬い壁になるのだった。まるで巨大な岩山であった。（湯川秀樹「旅人-ある物理学者の回想」、1958年）
2. 「訓読」や「漢文脈」に関する研究の盛行、東アジア文学としての漢詩文の可能性
3. 若年層の漢文の教養は大きく低下、旧漢字を読むことに困難を感じる学生もいる（漢文だけではなく、和文も含めた古典全般に関する教養の低下）
4. 学生の学習環境の変化（電子情報への依存）

Ⅲ 江戸・明治期における漢文の素養の推移

1. 江戸時代における漢詩文関係の入門書・啓蒙書の豊富さ（国字解もの、詩韻書など）
2. 明治時代の漢詩文文化の多層性（専門的な作詩から詩吟・剣舞などの大衆文化まで）
3. 青年層の漢文の素養が変質したのは、明治20-40年代（1890-1910年頃）、制作→鑑賞
4. 漢文は漢文訓読調の文章へ（記事論説文例、行政語や学術語に漢文の教養が必要）
5. 漢詩は明治20年代に、時代の詩歌としての役割を終える（新聞の漢詩欄はなお存続）
   （ア）漢詩は有体にいはゞ早晩亡びるねエ（森鷗外「今の文学界」1897年）
   （イ）もっともそれ以後〔発表者注:1894-95年の日清戦争のこと〕においても、漢詩を作り漢文を作るひとが全然なくなったというのではない。（略）しかし、その作品はもう特殊な専門家の間にだけ通用するにとどまって、一般の人びととは何の関係ももたない無縁の存在となってしまった。（神田喜一郎「日本の漢文学」、1959年）
6. 以降の漢文をめぐる複数の文脈、学校教育のなかでの漢文（国家道徳との接近）、アカデミズムにおける中国学（中国語への傾斜）、家庭での伝統

Ⅳ 教育現場における試み

1. 基礎訓練の実施、毎時間新しい漢詩を読ませる、とにかく自分の力で読解してもらう（漢文と触れる回数を増やす、教員は仏となりひたすら励ます）
2. 今日的な関心事を取り入れる、壬辰戦争（文禄・慶長の役、イムジンウェラン）を扱った江戸時代の漢詩などは、今日の問題ともつながるので学生は興味を持つ
3. 日本と中国の漢文だけではなく朝鮮や琉球の漢詩を取り上げる、漢文の国際性を強調

東アジア史教科書の新旧単元(キム・ミンギュ)

1. 2011 年版東アジア史教科書

出版社	大単元	中単元	小単元
教学社	Ⅰ東アジア史のはじまり	1. 東アジア世界と自然環境	1)私たちの生きる東アジア世界 2) 東アジアの自然環境
		2. 東アジアの先史文化	1)東アジアの先史人類と文化 2)多様な新石器文化の発展 3)青銅器文化の発展と交流
		3. 農耕と牧畜、文明を生み出す	1) 農耕のはじまりと発展 2) 遊牧・狩猟社会の生活
		4. 国家の成立と発展	1)中原農耕国家の形成と発展 2)遊牧国家の形成と発展 3)古朝鮮と南越の形成と発展
	Ⅱ 人口移動と文化交流	1. 地域間の人口移動と戦争	1)人口移動の展開 2)国家の統合と発展 3)文物の伝播と交流の増大
		2. 仏教の拡散と定着	1)インド仏教、中原へ 2)中原仏教、周辺へ 3)仏教の受容と東アジア文化の疎通
		3. 律令と儒教に基づいた統治体制	1)儒教の成立と律令 2)律令と儒教の拡散 3)東アジア文化の発展
		4. 東アジアの国際関係	1)朝貢・冊封関係の展開 2)多元的国際関係の形成
	Ⅲ 生産力の発展と支配層の交替	1. 北方民族と国際秩序の再編	1)宋の建国と北方民族の圧迫 2)一元的国際秩序を作ったモンゴル帝国 3)東アジア国際秩序の再編
		2. 農業生産力の発展と小農経営	1)農業技術の発達と生産力の増大 2)農業生産力の発展と小農経営の成長 3)商工業と都市の発達
		3. 文臣と武人	1)科挙制と新しい支配層の登場 2)高麗・朝鮮の支配層の変化 3)武人が支配する日本社会
		4. 性理学の展開	1) 性理学の成立と特徴 2) 性理学の地域的展開と交流 3)社会の変化と新しい儒学の模索
	Ⅳ 国際秩序の変化と独自の伝統の形成	1. 17 世紀前後東アジアの戦争	1)16 世紀中盤の東アジア 2)壬辰・丁酉戦争の発生と展開 3)丁卯・丙子戦争の発生と展開 4)明清交替と東アジア情勢の変化
		2. 銀の流通と交易網	1)東アジア世界の銀の流通と中国 2)日本の貨幣制度と銀の流通 3)朝鮮の流通体系と銀 4)東アジア3国の交易と交流
		3. 人口増加と都市化	1)中国と日本、朝鮮の人口増加 2) 都市化の進展と特徴
		4. 庶民文化と各国の独自の伝統	1)明・清の社会と文化 2)江戸幕府の社会と文化 3)朝鮮後期の社会と文化
	Ⅴ 国民国家の模索	1. 開港と国民国家	1)西欧世界と3国の開港 2)文明化の試みと国民国家

			3)東アジア伝統秩序の変化 4)日露戦争と3国それぞれの道
		2. 侵略戦争の拡大と民衆の被害	1)第一次世界大戦と東アジア 2)ワシントン体制:東アジアの新しい国際秩序 3)15年間続いたアジア太平洋戦争
		3. 侵略への抵抗運動	1)新しい出発:辛亥革命と独立軍基地建設 2)帝国主義への抵抗の大衆化と分化 3)抗日戦争の拡大と反戦連帯活動
		4. 西洋文物の受容と社会の変化	1)世界を見る新しい目 2)近代知識の通り道:新聞と学校 3)日常における時間と空間の変化 4)西洋式都市の生成
	Ⅵ 今日の東アジア	1. 戦後処理と国交回復	1)戦後処理と米ソの東アジア政策 2)冷戦と戦後処理 3)再び修交する東アジア諸国
		2. 冷戦の中の熱戦	1)新中国の誕生 2)6・25戦争(朝鮮戦争) 3)ベトナム戦争
		3. 経済成長と地域内交流	1)韓国と日本の経済発展 2)社会主義国の計画経済 3)地域内経済交流の活性化
		4. 東アジア各国の政治と社会	1)日本の政治と社会 2)韓国の政治と社会 3)中国の政治と社会 4)ベトナムと北朝鮮の政治と社会
		5. 東アジアの歴史をめぐる葛藤と和解	1)21世紀の世界と東アジア 2)東アジアの歴史問題 3)領土をめぐる問題 4)和解と協力に向けて
天才教育	Ⅰ 東アジア史のはじまり	1. 東アジアと 東アジア史の学習	1) 東アジアの地域範疇 2) 東アジアの自然環境 3) 東アジア史学習の意義
		2. 先史文化の展開	1) 東アジア史のはじまり 2) 東アジアの新石器文化 3)青銅器分化の発展
		3. 農耕社会と牧畜社会	1)気候、環境と生業 2)農耕と農耕社会 3)牧畜と牧畜社会
		4. 国家の成立と発展	1)黄河中流地域の国家樹立 2)中原の統一と諸国の成立 3)国家体制の整備と相互交流
	Ⅱ 人口移動と文化交流	1. 人口移動と交流の増大	1)人口移動の展開 2)移住政権から地域国家へ 3)文物の伝播と相互交流の増大
		2. 仏教の伝播と土着化	1)大乗仏教の成立と発展 2)仏教の東アジアへの伝播と土着化 3) 仏教と東アジア社会
		3. 律令体制の受容	1)律令と儒教 2)隋・唐の律令体制 3)律令体制の伝播と地域的特長
		4. 国際関係と外交活動	1)朝貢・冊封という外交形式 2)多元的外交の展開

			3)唐代の東アジア
	Ⅲ 生産力の発展と支配層の交替	1. 北方民族の成長	1)北方民族の成長と東アジア国際関係の多元化 2)モンゴル帝国の成立と発展 3)交易網の統合と多様性の拡大
		2. 農業の発展と小農経営	1)農業生産力の発展 2)小農経営の展開 3)手工業と商業の発達
		3. 新しい支配層の登場	1)文臣と武人 2)科挙制の施行と文人官僚層の形成 3)武人の成長と武士政権の成立
		4. 性理学の成立と拡散	1)性理学の成立と発展 2)性理学の拡散 3)政治理念から社会規範への拡散
	Ⅳ 国際秩序の変化と独自の伝統の形成	1. 17 世紀前後東アジアの戦争	1)16 世紀東アジア情勢 2)壬辰戦争と丙子戦争 3)戦争の被害・戦争を通しての交流
		2. 交易網の発達と銀の流通	1)東アジア交易網の発達 2)ヨーロッパの進出と交易網の拡大 3)貿易の発達と銀の流通の活性化
		3. 人口増加と都市化	1)急激な人口増加 2)商業と都市の発達 3)庶民文化の発達
		4. 伝統社会の完成	1)清代の中国社会 2)後期の朝鮮社会 3)江戸時代の日本社会 4)17～19 世紀のベトナム社会
	Ⅴ 国民国家の樹立	1. 開港と国民国家樹立への努力	1)西洋勢力の登場と東アジアの開港 2)近代的改革の推進 3)国民国家の樹立と挫折
		2.帝国主義的侵略と被害	1)帝国主義的侵略戦争の展開 2)日本帝国主義の朝鮮支配 3)世界大戦と日本のアジア侵略 4)侵略戦争による被害
		3. 民族主義と民族運動	1)19 世紀後半の民族運動 2)民族主義思想の拡散 3)帝国主義的侵略に抵抗した民族運動
		4. 平和への努力	1)反戦・反帝国主義思想の形成 2)抗日のための国際連帯
		5. 西洋文物の受容と社会変化	1)自強と侵略の論理、社会進化論 2)新聞と近代的学校の登場 3)陽暦の採択と鉄道の建設 4)都市の形成 5)女性の権利の伸長と女子教育
	Ⅵ 今日の東アジア	1. 戦後処理と国交回復	1)第二次世界大戦と戦後処理の構想 2)東アジアの戦後処理 3)東アジア各国の国交樹立
		2. 冷戦と戦争	1)国共内戦 2)6・25戦争(朝鮮戦争) 3)ベトナム戦争
		3. 経済成長と域内交易の活性化	1)日本と韓国の高度成長と東アジア型発展モデル 2)社会主義圏の開放と経済発展

			3)域内交易と東アジア経済圏の形成
		4. 民主化と社会変化	1)民主主義政治の発展 2)社会主義体制の変化 3)韓国・日本・中国の社会変化
		5. 東アジアの葛藤と和解	1)領土をめぐる対立 2)歴史問題に因る葛藤 3)和解のための努力

2. 2014 年版東アジア史教科書

출판사	대단원	중단원	소단원
教学社	Ⅰ 東アジア史のはじまりと国家の形成	1. 東アジアの自然環境と生活様式	1)私たちの生きる東アジア 2)東アジアの自然環境 3)東アジアのさまざまな生活様式
		2. 東アジアの先史文化	1)東アジアの先史人類と文化 2)多様な新石器文化の展開 3)青銅器文化の発展と交流
		3. 国家の成立と発展	1)中原農耕国家の形成と発展 2)国々の成立と国際情勢
	Ⅱ 東アジア世界の成立	1. 地域間人口移動と戦争	1)人口移動と国家の成立 2)国家の統合と発展 3)文物の伝播と交流の増大
		2. 冊封・朝貢と東アジアの国際関係	1)冊封・朝貢関係の形成 2)国際関係の変動
		3. 律令と儒教に基づいた統治体制	1)律令と儒教の成立 2)律令と儒教の拡散
		4. 仏教の伝播と受容	1)仏教の成立と伝播 2)朝鮮半島と日本、ベトナムにおける仏教の受容 3)仏教を通しての東アジア文化の交流
	Ⅲ 国際関係の変化と支配層の再編	1. 遊牧民族の成長と多元的国際関係	1)遊牧民族の成長と高麗・宋の成立 2)多元的国際関係の形成 3)モンゴル帝国と一元的国際秩序の成立
		2. 新しい支配層:士大夫と武士	1)農業生産力の増大と商工業の発達 2)科挙制と士太夫の成長 3)武士が支配した日本社会
		3. 性理学の展開	1) 性理学の成立と特徴 2) 性理学の地域的展開と交流
		4. 東アジア国際秩序の再編と動揺	1)明中心の国際秩序再編 2)海禁と倭寇
	Ⅳ 東アジア社会の持続と変化	1. 東アジアの国際戦争	1)16 世紀中盤の東アジア 2)壬辰・丁酉戦争の発生と展開 3)丁卯・丙子戦争の発生と展開 4)明清交替と東アジア情勢の変化
		2. 16～19 世紀の社会変動	1)農業生産力の発達と人口増加 2)商工業の発達 3)都市の発達
		3. 学問と科学技術・庶民文化の発展	1)東アジア 3 国の学問の発達 2)新しい学風の登場 3)庶民文化の成長
		4. 交易関係の変化と西欧との交流	1)16 世紀中盤の東アジア 2)東アジア 3 国の銀の流通 3)西欧との交流

	V近代国家樹立の模索	1. 開港と近代国家の樹立	1)西欧列強の侵略と3国の開港 2)自強への努力 3)東アジア秩序の再編
		2. 日露戦争と3国のそれぞれの道	1)3国干渉と東アジア情勢 2)文明化の試みと国民国家 3)日露戦争と東アジア 4)韓国併合、辛亥革命と東アジア
		3. 反帝国主義民族運動とワシントン体制	1)3国の新たな模索 2)第一次世界大戦と東アジア 3)ワシントン体制と東アジアの民族運動
		4. 日本の侵略戦争の拡大と民衆の被害	1)満州事変と武装抵抗 2)日中戦争と総動員体制 3)アジア・太平洋戦争と建国への準備
		5. 西洋文物の受容と社会の変化	1)世界を見る新しい目 2)近代知識の通り道:新聞と学校 3)日常における時間と空間の変化 4)西洋式都市の生成
	VI 今日の東アジア	1. 戦後処理と東アジアの冷戦	1)米ソの東アジア政策と戦後処理 2)冷戦体制の固定化 3)冷戦体制の変化と解体
		2. 経済成長と交易の活性化	1)韓国と日本の経済発展 2)計画経済を追求した社会主義国家 3)地域内経済交流の活性化
		3. 政治と社会の発展	1)日本の政治 2)韓国の政治 3)中国の政治 4)ベトナムと北朝鮮の政治 5)東アジアの社会変化
		4. 東アジアの歴史をめぐる葛藤と和解	1)新しい国際関係の模索 2)東アジアの歴史問題 3)領土をめぐる問題 4)和解と協力をめざして
天才教育	I 国家の形成	1. 東アジアの自然環境と生業	1) 東アジア世界の昨日と今日 2) 自然環境と生業 3) 農業と遊牧
		2. 先史文化の展開	1)東アジア史のはじまり 2)東アジア各地の新石器文化 3)青銅器文化の発展
		3. 国家の成立と発展	1)国家の出現 2)中原の統一と諸国の成立 3)国家体制の整備と相互交流
	II 東アジア世界の成立	1. 人口移動と戦争	1)人口移動の展開 2)権力の移動と戦争 3)文物の伝播と相互交流の増大
		2. 国際関係と外交活動	1)外交の展開 2)外交関係の多元化 3)唐代の東アジア国際関係
		3. 律令と儒教に基づいた統治体制	1)律令と儒教 2)隋・唐の律令体制 3)律令体制の伝播と地域的特長
		4. 仏教の伝播と土着化	1)大乗仏教の成立と伝播 2)東アジアの仏教 3)仏教と東アジア社会

	Ⅲ 国際関係の変化と支配層の再編	1. 遊牧民族の成長と国際関係の多元化	1)遊牧民族の成長 2)宋の対外関係と交易 3)高麗の自主外交 4)モンゴル帝国の成立と発展
		2. 士大夫と武士	1)農業生産力と商工業の発展 2)新しい支配層の登場 3)科挙制と士太夫の成長 4)武士と幕府政治
		3. 性理学の成立と拡散	1)性理学の成立と発展 2)性理学の拡散 3)政治理念から社会規範へ
		4. 交流の活性化と国際秩序の変化	1)交易網の統合と交流の活性化 2)新しい政治秩序の胎動 3)国際関係の変化
	Ⅳ 東アジア社会の持続と変化	1. 17 世紀前後東アジアの戦争	1)16 世紀東アジア情勢 2)17 世紀前後の東アジアの戦争 3)国際秩序の再編と文物の交流
		2. 16~19 世紀の社会変動	1)各国の社会変化 2)商業と都市の発展 3)人口の増加
		3. 学問と科学技術・庶民文化	1)学問の発展 2)科学技術の発展と東西交流 3)庶民文化の発達
		4. 交易関係の変化と銀の流通	1)東アジア各国の交易関係 2)ヨーロッパの進出と交易網の拡大 3)銀の流通の活性化
	Ⅴ近代国家樹立の模索	1. 近代化運動と国際関係の変動	1)西洋勢力の登場と東アジア諸国の開港 2)近代化運動の展開 3)東アジア国際秩序の変動
		2. 帝国主義的侵略と民族運動	1)帝国主義列強の東アジア侵略 2)中国民族主義の発展と日本帝国主義 3)朝鮮の民族運動 4)ベトナムとモンゴルの民族運動
		3. 侵略戦争の拡大と国際連帯	1)日中戦争とアジア・太平洋戦争 2)侵略による被害と苦しみ 3)抗日のための国際連帯
		4.西洋文物の受容	1)西欧的世界観の拡散 2)近代的知識の拡散 3)西欧文物の導入
	Ⅵ 今日の東アジア	1. 戦後処理と東アジアの冷戦	1)第二次世界大戦の戦後処理と冷戦の成立 2)冷戦と東アジアの戦争
		2. 経済成長と交易の活性化	1)資本主義圏の高度成長 2)社会主義圏の開放と経済発展 3)交易の活性化
		3. 政治と社会の発展	1)民主政治の発展 2)社会主義体制の変化 3)社会変化と社会運動
		4. 東アジアの葛藤と和解	1)領土をめぐる葛藤 2)歴史認識をめぐる葛藤 3)和解と協力への模索
飛翔教	Ⅰ国家の形成	1. 自然環境と生業	1)東アジア学習の重要性 2)東アジアの自然環境と生業

育		2. 新石器文化	1)東アジアに登場した人類 2)東アジアに登場した新石器文化
		3. 国家の成立と発展	1)中国農耕地域における国家の形成と発展 2)遊牧地域における国家の形成と発展 3)朝鮮半島・日本・ベトナム地域における国家の形成と発展
	Ⅱ 東アジア世界の成立	1. 人口移動と戦争	1)人口移動による国家の形成 2)統一国家と地域国家の成立と人口移動 3)交流の拡大と文化の伝播
		2. 東アジアの多様な国際関係	1)朝貢・冊封制度 2)多元化した国際外交 3)唐中心の国際秩序の形成
		3. 律令と儒教に基づいた統治体制	1)律令と儒教の結合 2)隋・唐の律令体制 3)東アジア各国の律令受容とその様相
		4. 仏教の伝播と文化交流	1)仏教の伝播と土着化 2)東アジア仏教の役割 3)仏教を通しての東アジアの文化交流
	Ⅲ 国際関係の変化と支配層の再編	1. 遊牧民族の成長と多元的国際関係	1)北方民族の成長 2)多元的国際関係の展開 3)交流の増大と海上貿易の発展
		2. 生産力の発展と新しい支配層の登場	1)農業生産力の発達と小農経営 2)商工業の発達 3)科挙制と文臣官僚の登場 4)武人の成長と武士政権の成立
		3. 性理学の成立と拡散	1)性理学の成立 2)性理学の拡散 3)性理学の社会規範化
		4. モンゴル帝国以後の地域内外交流	1)モンゴル帝国の成立 2)元の支配と東アジア各国の対応 3)世界的交易網の形成 4)新しい国際関係の展開
	Ⅳ 東アジア社会の持続と変化	1. 17 世紀前後東アジアの戦争	1)16 世紀東アジアの情勢 2)壬辰・丁酉戦争 3)丁卯・丙子戦争 4)戦争を通じての交流
		2. 16～19 世紀の社会変化	1)17 世紀以降の東アジアにおける人口増加 2)商工業の発達 3)都市の成長 4)17 世紀以降の社会変化
		3. 学問と科学技術・庶民文化	1)16 世紀以降の東アジアの学風 2)西洋学問の受容と科学技術の発達 3)庶民文化の発達
		4. 地域内交易関係の変化・西欧との交流	1)東アジアの伝統秩序と交易関係 2)東アジア交易の変化と銀の流通 3)西欧との交流と交易網の拡大
	Ⅴ近代国家樹立の模索	1. 近代化運動と国際関係の変動	1)東アジアの開港 2)各国の近代化運動 3)東アジア国際秩序の変動
		2. 帝国主義的侵略と民族運動	1)日本の帝国主義的侵略 2)民族運動
		3. 侵略戦争の拡大と国際	1)日本の侵略戦争の拡大

		連帯	2) 日本の侵略戦争による東アジアの人びとの苦しみと被害 3) 反戦・平和運動 4) 国際的連帯による抗日闘争の展開
		4. 西洋文物の受容	1) 西欧近代知識・思想の流通？普及？流れ？ 2) 近代的学校と新聞の登場 3) 伝統的日常の変化
	VI 今日の東アジア	1. 戦後処理と東アジアの冷戦	1) 第 2 次世界大戦の戦後処理と冷戦の形成 2) 東アジアの熱い戦争 3) 冷戦の緩和と国交樹立
		2. 経済成長と交易の活性化	1) 東アジア諸国の経済成長過程 2) 日本・韓国・台湾の経済成長 3) 社会主義諸国の開放と経済発展 4) 経済交流の活性化
		3. 政治と社会の発展	1) 民主主義の発展 2) 社会主義諸国の体制変化 3) 社会変化と市民運動の活性化
		4. 葛藤と和解	1) 東アジアにおける葛藤の背景と特徴 2) 歴史をめぐる葛藤 3) 領土問題による葛藤 4) 和解に向けての努力